

研究紀要

〔54〕

令和4年3月

大阪府立中央聴覚支援学校

目次

1. 校内研究会報告 … 研 究 部
2021年度 校内研究について
「聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践」
2. 子どもが主体的に活動するために、教員ができること … 幼 稚 部
～探求することの大切さ～ 奥 西 仁 美
土 口 真 奈
3. 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～ … 小 学 部
4. 自ら考え創造する力を育むろう教育とは … 中 学 部
～主体的・対話的で深い学びの視点から～
5. 新型コロナウイルス感染拡大防止対策下での学校教育の情報化 … 高 等 部
—ICTを活用した主体的・対話的で深い学びの実践から— 数 学 科
札谷美奈江
6. 「こころとからだを育てる実践」を考える … 寄 宿 舎
研 修 係
7. <第54回全日本聾教育研究大会（島根大会）第5分科会発表> … 片 山 恵 里
子どものねがいに寄り添って～実践を記録し、実践を記録する～

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

2021年度 校内研究について

研究部

研究テーマ 「聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践」

1. テーマ設定の理由

2018年度、2019年度の2年間で「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」を研究テーマに据え、「主体的・対話的で深い学び」について基礎的なことを学んできた。その上で、幼稚部は保育、小学部・中学部・高等部は授業、寄宿舎は生活指導において子どもたちの発達段階や特性に即した研究を2年間行った。「主体的・対話的で深い学び」に関する教育実践は多々あるが、学習スタイルの多様性や幅広い教育的ニーズが存在する聴覚支援学校に焦点をしばった研究はまだ少数である。上記のことを踏まえ、2020年度は「主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践」を研究テーマに据え、取り組んできた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、研究を進める機会が減った。また、昨年度の研究活動を通して、新しい生活様式を踏まえての実践を行った際の課題も流露したため、今後も3つの学びについて考えていく意義があると考え。そのため、今年度も引き続き聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践を蓄積し、4年間の研究のまとめとしたい。また、本校は2020年9月13日に創立120周年を迎えた。創立の経緯や、今日までの教育、大きな功績を残された人物など、その長く深い歴史について振り返り、今後の教育活動にいかしたい。そこで、卒業生を招聘してのパネルディスカッションや本校の歴史についての研究会を行い、聾学校の良さや課題を振り返り、これからのろう教育に大切なものを考え、共通理解を深めていきたい。

2. 校内研究会 報告

(1) 日 時 令和3年9月11日(土) 14:00～16:00

(2) 講 師 前田 浩 氏 (聴覚障がい者対象就労支援センター 理事長) 元 本校教諭

山脇 圭二 氏 (公益社団法人 大阪聴力障がい者協会 常任理事)
(大和ハウス工業株式会社)

(3) テーマ 120周年を振り返って。そして未来へ

(4) 要 約

本校が昨年度120周年を迎えたことをきっかけに、本校の歴史、今後の聾学校の在り方についての講演会を企画した。前半は山脇圭二氏より、自身の経歴の紹介を含め、聾学校時代の経験と就職してからのきこえる世界での経験について話をしていただいた。その中で私たち教職員は本校に通っている幼児児童生徒や卒業生とたくさんコミュニケーションをとり、ろう社会ときこえる社会の違いを理解することが大切であることを共通理解した。後半は前田浩氏に本校の歴史をふまえ、手話の尊さについて話をしていただいた。本校の歴史的功績ともいわれる、手話の擁護、適性教育の大切さは第6代校長の高橋潔の「手話は、聾啞者が住める王国である」という信念からも考えられる。また大曾根源助が発表した指文字も、聴覚障がい児の言語指導に革命をもたらし、コミュニケーションにおける精度を高め、音韻系列による思考を促進した。このことをきっかけに、教員と生徒の信頼が築けるようになっていった。このような時代を経て、現在の聾学校はPort(個々の子どもに応じて燃料や水を提供する。子どもがいつでも出入りできる)でありFort(子どもたちが守られる場、聴覚障がい専門センター)であるという意識をもつことを一人一人の教員が理解し、これから幼児児童生徒と関わっていく必要があることを全教職員で共有した。

子どもが主体的に活動するために、教員ができること

～探究することの大切さ～

幼稚部 奥西仁美 土口真奈

1 はじめに 目的

幼児期における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものである。このために教員が取り組むべきことについて、幼稚園教育要領には次のように示されている。「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」（平成29年告示、総則）

このように、子どもの学びをより深めるには、教員のさまざまな工夫が求められていることがわかる。工夫をするためには経験や知識が関わっていて、そのためには「探求」することが必要である。

研究目的の達成に向け、幼稚部では3つのねらいを掲げて研究を進めた。

- ① 教員が主体的、対話的に学び、知識や技能の習得をめざす。
- ② 教員の保育力の向上「質の高い保育」をめざす。
- ③ 保育における主体的、対話的で深い学びにつながる指導支援を整理する。

子どもにとって主体的・対話的で深い学びになる保育をつくるのは教員であるため、今年度、教員が探究することの大切さに着目し、研究することにした。

2 研究内容

今年度は、幼稚部内での保育参観と、小学部との合同勉強会を行った。

(1) 幼稚部保育参観

学年ごとに保育参観週間を設けた。各学年の担任が1週間分の保育予定(資料1)を作成し、参観者は、保育において子どもが主体的に活動している場面に着目して観察を行った。その際に活用した「保育観察シート(資料2)」は、観察する視点として「保育場面」「子どもの様子」「教員の関わり」「環境構成」「他の子ども・保護者の様子」の項目に分けて記入できるように作成した。これを通して、教員一人ひとりが、子どもが主体的に取り組んでいる活動に関心を寄せ、考えるきっかけとなった。そして、どのような要素が、主体的に活動することに関わっているのかを整理することによって、教員が保育の中で工夫している点を見つけることができた。

(2) 幼小合同勉強会

教員が授業・保育の中で工夫していくためには、経験や知識が必要であることから、「教員が主体的に探究する」をテーマに講義やグループワークを進めた。勉強会は幼稚部、小学部合同で年間通して4回行った。全勉強会を通し、「興味のあること」に着目して話し合うところから、「探求」の大切さに気づくことに繋げることができた。

また、教員の「主体的・対話的で深い学び」の取り組みについて、勉強会を行う前と行った後の2回、アンケート(資料3)を実施した。質問項目は、「主体的・対話的で深い学び」についての知識確認を選択式、勉強会を通しての感想を記述式とした。これを通して、教員の意識や、勉強会を経たあとの知識や意欲などを共有することができた。

第1回 「主体的とは何か」

「どうして主体的になれるのか」「どのような気持ちをもっているとき、主体的になれるのか」の問いかけから、「主体的」について整理した。教員一人ひとりが日頃“おもしろい”と思って取り組んでいる活動や趣味について、グループワークで共有した。自分自身の趣味について具体的に考え、まわりに伝えるために、

- ① 準備段階から楽しんだ後まで、どのようなことをしているか
- ② 好きな理由
- ③ 今後の展望、または次にしてみたいこと

の観点をもって話し合った。参加者の話題には「スポーツ」「ペットと遊ぶ」「アウトドア」などが挙がり、一人ひとりの趣味をグループ内で共有することができた。興味をもっていることには、主体的に取り組むことができると全員で確認した。

第2回 「探究とは何か」

第1回で“おもしろい”ことについて具体的に考えたとき、新しい知識が増えたり、さらに関心が深まったりすることを確認した。ここでは、この過程を「探求」と定義する。そこで、物事を探究する方法としてR・PDCAサイクルを活用し、グループごとに決められたテーマ「筋トレ」「犬を飼う」「キャンプ」「ジャニーズ」「釣り」「楽器」について探究し、共有した。調べてプレゼンする作業を通して、「深く知ってみることが楽しかった」「身近にない分野について知る機会になった」という意見があった。探究とは、“何かについて調べたり具体的に考えたりすることであり、それを通して深い学びになる”。ここでは探究する大切さに気づくことができた。

第3回 「主体的に探究していることを共有しよう（授業・保育編）」

授業・保育を行ううえで、教員が探究することについて考えた。実際に、教員が主体的に作った教材例を挙げ、工夫点を見つけた。さらに、グループに分かれて『遠足の絵（絵画）』『クリスマスツリーをつくろう（製作）』『植物の一生（理科）』などの題材をテーマに、授業・保育の工夫点を話し合った。各グループからの発表では、遠足の事後学習として話題に挙がりそうな写真を用意しておく、子どもが出来事を思い出せるよう経験したことを再現するなどの方法があった。どのグループの発表にも、物や出来事を視覚化したり、教材の提示方法を工夫したりして、子どもの興味を引き出そうとする共通点を見つけることができた。授業・保育に膨らみを出すためには、まずは教員が主体的に探究し工夫する必要があることを共有した。

第4回 「主体的に探究していることを共有しよう（仕事編）」

第3回で共有したことを教育活動に生かすことについて考えた。教員として主体的に探究している事例「外部で行われている講義に参加する」「子どもが練習していることを教員も練習する」「本などから、子どもの実態に合った教材を探し、作る」を紹介した。それぞれの事例について、経験談や、自分もしたいことがあるかななどを2～3人で話し合う活動を行った。話し合った教員の中には、「実は講義を受けて学びたい（探究したい）ものがある」と話す人や、「休日、定期的にスポーツクラブに通い、学校では子どもにその技術を伝えている」と経験を語る人がいた。この回を通して、探究は、興味をもつことから始まるということや、主体的に探究したことを活用することで子どもの学びが深まるということに気づくことができた。

3 研究結果

(1) 幼稚園保育参観における「保育観察シート」より

子どもの主体的な活動のまわりには、どんな環境があるのか調べた。子どもの主体性に影響を与えているものを「ア 教員の関わり」と「イ 環境構成」の大きく2つに分類し、考察した。網掛部分の事例は、解説で用いることを示している。

ア 教員の関わり

子どもの様子	具体的な関わり方
<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや教員と関わりながらのびのびと遊んでいた。(5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々に応じたことば掛けをしていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・音遊びで、早く始めたいので教員の方を見て返事をしようとしていた。(1歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手の顔を見る習慣を付けられるよう、名前を呼んでから始めることを促す。
<ul style="list-style-type: none"> ・前回にしたお話の内容を思い出していた。(5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・記憶を引き出せるよう、適宜ヒントを出していた。
<ul style="list-style-type: none"> ・かえる跳びで、ゆっくり丁寧に行っている友だちの様子を見て、競争ではなくゆっくり丁寧にすることを意識していた。(5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの様子を見て行動を改められるよう、「ゆっくり丁寧にすることがかっこいい」とことばかけをしていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・オムツ入れを持ってトイレに向かっていた。(1歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意志で向かえるよう、部屋からトイレまでの道のりで、時々「トイレに行くよ」とことばかけと指さしをしていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが知っている太鼓の話をしていた。(5歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・太鼓に興味をもてるよう、「どんな太鼓を知っているか」質問をしていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・製作で、何を描いたのか、手話で表現したり、写真から選んだりして伝えていた。(4歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの課題に応じた表現方法で、自ら伝えられるよう、手話や写真を提示しながら質問していた。
<ul style="list-style-type: none"> ・指文字でことばを表現しようとしていた。(4歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードに文字を書いて、一緒に指文字で表現していた。
<ul style="list-style-type: none"> ・カードをめくるゲームの中で、決まったことばを友だちや教員と一緒に言っていた。(3歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・見やすいよう、めくったカードを再度手に取って見せていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・教員の真似をして遊ぼうとしていた。(1歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・用途に応じた物の使い方ができるよう、遊び方を見せていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・虫かごからバッタが飛び出したところを捕まえて、撫でていた。(4歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関心のあることで集中して遊べるよう、見守っていた。

関わりの例として、ことばかけ、指さし、可視化する支援、見守りなどが挙げられる。5歳児のかえる跳びの事例では、子ども同士で競い合っていたところに教員がことばかけしたことにより、他の友だちの行動を見て自分の行動を改めるきっかけになっている。

どの関わりの事例でも、子どもそれぞれの課題に応じた支援・指導を行うことで、子どもが自ら考えて表現したり、行動したりすることができたと考える。

イ 環境構成

子どもの様子	効果的と思われる環境づくり
<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや教員と関わりながらのびのびと遊んでいた。(5歳) ・跳び箱の練習で、子どもが達成感を感じていた。(5歳) ・帰りの支度を終えて、すぐに活動に参加していた。(3歳) ・リズム打ちで、みんなと一緒にのときは気持ちが乗らなかったが、一人で発表すると一生懸命していた。(5歳) ・空いている椅子に誰が座るかを考えていた。(4歳) ・家庭以外の場所でも、親から少し離れて遊んでいた。(1歳) ・かえる跳びで、ゆっくり丁寧にしている友だちの様子を見て、競争ではなくゆっくり丁寧にすることを意識していた。(5歳) ・カードと動画を交互に指さしながら、注目していた。(4歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと教員の信頼関係ができているので、安心した雰囲気の中で過ごすことができている。 ・子ども一人ひとりが跳べたことを、みんなで拍手して認めていた。 ・全員が支度を終えて活動に参加できるよう、手遊びを展開していた。 ・みんなに見てもらいたい気持ちを認め、一人で発表する場面をつくっていた。 ・まだ着席していない子どもの分の椅子も並べていた。 ・子どもが自分で遊びに向かえるよう、興味に合ったおもちゃをあらかじめ置いていた。 ・友だちの様子をお互いに見合えるよう、グループに分けて順番に行っていた。 ・教材に注目できるよう、部屋を暗くし、見やすい位置にiPadを置いていた。

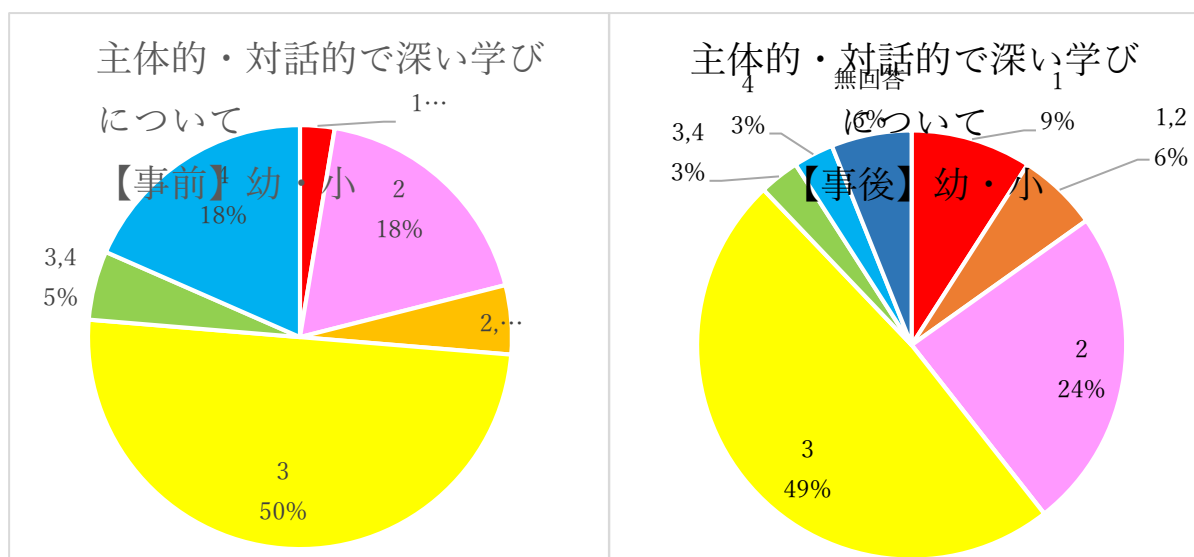
環境構成の例として、雰囲気づくり、場面の切り替え、物理的配慮などが挙げられる。5歳児のかえる跳びの事例を挙げてみると、ここでは子どもを2つのグループに分けて、お互いが見えるように配慮している。他の友だちの様子を見たことで意識をしたことがわかる一方で、競争している友だちの様子を見て、「ゆっくり丁寧にしよう」と考えるきっかけになったことも考えられる。

環境の配慮によっても、子どもが自ら考えたり、判断したり、行動したりすることを促すことができる確認できる。

(2) 幼小合同勉強会におけるアンケートより

まず、「主体的・対話的で深い学び」について、教員それぞれが理解しているかどうかを尋ねた(グラフ1)。回答の選択肢は、「1内容を理解していて説明もできる。授業でも実践している。」「2内容は理解していて説明もできる。授業での実践を悩んでいる。」「3なんとなくは理解している。」「4正直よくわかっていない。もう一度学び直したい。」とした。

(グラフ1)「主体的・対話的で深い学び」について



「1」、「1と2」、「2」は、「理解している」とする。事前アンケートでは、「1」が3%とかなり低く、「3」を含めた回答が40%、「4」が18%となっている。理解している人の割合は全体の21%である。教員全体が、「主体的・対話的で深い学び」についての知識に自信をもてていないことがうかがえる。

事後アンケートでは、「1」を含めた回答が15%、「3」を含めた回答が52%、「4」が3%となっている。理解している人の割合は全体の39%である。事前のものと比較すると、「主体的・対話的で深い学び」について理解している人の割合が増加し、理解していない人の割合が減少した。「主体的・対話的で深い学び」についての知識に、少しは自信をもてるようになった教員が増えたと考える。

4 成果と課題

今年度一年間の研究を通して、子どもが主体的に活動するためには、教員の工夫が関わっていることがわかった。また教員が物事を探究し、それぞれの子どものニーズに適した方法で実践につなげたときに、子どもの学びが深まることに気づくことができた。まず教員が興味をもって体験したり調べたりすることで、知識を得たり自信をもてたりする。それを生かすことで、保育の中で工夫することができ、活動に深みが出て、教員だけでなく子どもたちにとっても学びにつながる。今後、教員がこれを実感したうえで日々の保育と向き合うことで、保育の質が向上していくと考える。

また、幼小合同勉強会のアンケート結果から、教員が子どもや自分自身の主体性を見直すきっかけとなったようにも感じられる。勉強会に参加した教員からは、「子どもの成長を追求することがおもしろい」「日々の保育を通して、いつも新しいことに挑戦できる楽しさがある」「保育・教育について、知れば知るほどおもしろい」などの感想が寄せられた。「主体的・対話的で深い学び」についての理解を深めただけでなく、日々の保育を見つめ“おもしろい”“楽しい”と感じることを探究する機会となったことも研究の成果として挙げられる。

今年度は研修の日程が他学部のものとは重なることが多く、幼稚園・小学部以外からの参加者が数人にとどまってしまった。他学部からの参加者が多ければ、グループワークなどでさらに多方面からの意見が期待できると考えている。今後の課題として、検討していきたい。

資料1 幼稚部研究用 保育予定表

令和3年 月 日 ()				歳児	指導者
時間	活動内容	場所	担当者	ねらい	
10:00	①朝のあつまり	ひよこ1		①一日の活動の見通しをもてるようにする。	
10:15	②グループ学習	A ひよこ1 B ひよこ2		②秋のことば(くり、とんぼなど)にふれる。	
11:00	③製作「ケーキ」	ひよこ1		③自分のつくりたいものをイメージする。	
11:45	給食・自由遊び			④一日の活動を振り返る。	
13:15	④おかえり	ひよこ1			

令和3年 月 日 (月)				歳児	指導者
時間	活動内容	場所	担当者	ねらい	
9:30	①朝のあつまり			①	
	②			②	
	③			③	
	給食・自由遊び				
	④おかえり			④	

資料2 保育観察シート

保育観察シート

クラス名:		担当者:		時間: 時 分~ 時 分	
保育場面	子どもの様子	教師の関わり	環境構成	他の子ども・保護者の様子	
例) 野菜に水やりをしているとき……	例) OOと△△がじょうろの取り合いをしていた。OOが△△が取ったじょうろを使いたかった様子だった。しかし△△が……(詳しく!!)	例) 子どもの近くに器ながら見守っていた。(詳しく!!)	例) たくさんさんのじょうろが入っているバケツがテラスに置かれている。(詳しく!!)	例) バケツからじょうろを取り、水を入れに行ったり、野菜の様子を見ていたりしていた。(詳しく!!)	

記入者 ()

資料3 幼小合同勉強会アンケート（事前、事後）

教員の「主体的・対話的で深い学び」の取り組みについて 事前アンケート

幼稚部・小学部・中学部・高等部・寄宿舎・学部外 名前（ ）

問1 「主体的・対話的で深い学び」について

- 内容を理解していて説明もできる。授業でも実践している。
- 内容は理解していて説明もできる。授業での実践を悩んでいる。
- なんとなくは理解している。
- 正直よくわかっていない。もう一度学び直したい。

問2 ろう教育における教員の（大人の）「主体的・対話的で深い学び」とはどんなことだと思いますか？

主体的な学びとは

対話的な学びとは

深い学びとは

問3 勉強会で学びたいこと・やってみたいことは何ですか？（キーワードに○をしてください。複数回答可）

授業力・保育力 子どもの実態把握 個別的教育支援計画 個別の指導計画 教育課程

保護者対応 発達障害（自閉症スペクトラム症、ADHD、LD等） 語彙検査、発達検査 自立活動

教材、教具 学級、学年運営 進路 教育相談 福祉サービス（他機関との連携）

その他（ご自由にお書きください）

★アンケートのご協力、ありがとうございました。

教員の「主体的・対話的で深い学び」の取り組みについて 事後アンケート

幼稚園・小学部・中学部・高等部・寄宿舎・学部外

名前（ ）

★日々の保育・授業実践や今年度参加した勉強会・研修会などを振り返りながら先生方の率直な意見や考え、思いを記入してください。

問1 「主体的・対話的で深い学び」について

- 内容を理解していて説明もできる。授業でも実践している。
- 内容は理解していて説明もできる。授業での実践を悩んでいる。
- なんとなくは理解している。
- 正直よくわかっていない。もう一度学び直したい。

問2 ろう教育における教員の（大人の）「主体的・対話的で深い学び」とはどんなことだと思いますか？

主体的な学びとは

対話的な学びとは

深い学びとは

問3 今年度参加した幼小合同勉強会について

ご意見・ご感想

今後、幼稚園・小学部でともに学びたい、研究したい、共有したいこと

★アンケートのご協力、ありがとうございました。

主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～

小学部

1 はじめに

平成30年度から4年間、「主体的・対話的で深い学びの実現」にむけて、各学部で実践を行ってきた。小学部においては、独立行政法人教職員機構¹⁾が提唱する「アクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム(資料1)」から観点を導入して進めた^{2) 3)}。このピクトグラムは三つの学びをそれぞれ細分化し、具体的な学習活動の観点を示したものであり、「主体的な学び」は5つの観点、「対話的な学び」は7つの観点、「深い学び」は7つの観点が提示されている。さらに、主体的な学びは●、対話的な学びは■、深い学びは◆の記号を併記することで三つの学びのどの学びに迫るための指導であるかを明確にした。そうすることにより、自身の授業により三つの学びについて落とし込むことができると考えた。しかし、昨年度までの結果を見る限り、観点の傾向に偏りがみられることが分かったため、今年度は事例件数の少ない観点に焦点を当てて実践を行い、蓄積した事例を日頃の授業で参考になりうるようにしたいと考えた。

今年度も今までの研究活動を踏襲し、2年目以上の全教員が上記の観点を踏まえた指導案を作成し、他の教員から授業評価を受けることで、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの幅広い実践を蓄積し、そこから指導力の向上にもつなげたい。そこで、次のような研究の進め方を設定した。

2 研究活動の概要

(1) 小学部教員全員による研究授業

年次研修対象者は指導案を、その他の教員については指導略案を作成して研究授業を行った。学部内で参観することによって、小学部全体の指導力や研究テーマを踏まえた授業について研鑽する体制を構築した。今年度は聴覚障がい児教育が1年目の教員(以下、1年目の教員)の研究授業については、聴覚障がい児教育の素地を培うため、研究テーマに沿わなくてもよいことにした。

また、今年度も感染症対策として研究授業のビデオ撮影(教員、児童それぞれの顔が見えるように工夫した)を行い、密を避ける取り組みを行った。

(2) 指導案と授業評価の充実

指導略案AとB(資料2, 3)を作成し、Aは研究テーマに沿わない形式とし、Bはピクトグラムの観点からどのように授業を進めるかを記入する箇所と、本時の展開内に前述した3つの観点(●■◆)を挿入した。そうすることで、どの学習活動が三つの学びに結びつけることができるかを明確にし、研究主題の達成の方法がより伝わるように工夫した。

また授業を参観する際には、アドバイスシートを用いた。指導略案と同様にAとB(資料4, 5)を作成し、Aについては基本的な授業技術、環境整備の評価やアドバイスとなるコメントを多く記入できる形式とした。Bについては基本的な授業技術、環境整備のチェックに加えて、研究主題にどれだけ迫ることができたかの評価、コメントによるアドバイスの記入ができる形式とした。また、指導案に明記している「研究主題の達成に向けて」と連動するためにピクトグラムの各観点に対する評価欄を設けることで、研究授業の振り返りの際に活用し今後の指導にいかしていくようにした。

さらに、道徳の内容については「大分県教育委員会新学習指導要領対応 小学校各教科等学習指導案様式(例)」⁴⁾を参考に、独自の様式(資料6)を作成し、他教科との指導の違いを反映できるものとした。

(3) 授業後の振り返り

初任者研修のみ討議会を設け、授業参観者は全員参加とした。それ以外の研究授業者は、アドバイスシートの内容をもとに振り返りシートを記入し、今後の課題等について振り返る機会を設けた。

(4) 学習会

小学部全員で行う学習会を1回実施した。内容は次の通りである。

「聴覚支援学校小学部における主体的・対話的で深い学びの実現」

日 程 令和3年7月21日(水)

形 式 研究授業のビデオを見てグループワーク

授業内容 国語「伝記を読んで感想文を書こう」(5年)

(5) 若手教員の会

若手教員の会は、今年度は新規採用3年目以下の教員を対象に2回実施した。今年度については自由参加とし、若手教員の興味や意欲を基にした内容を設定した。

1学期に実施した1回目では、若手教員が現在抱えている悩みについて共有し、それらを解決する方法について議論を行い、各学年の事例検討を行うことが決まった。初めは、2年生の事例検討を夏休みにおこなった。担任より現状、課題について報告を共有した後、今後の支援方法についてグループワークを進めた。また、その中で新しく出てきたソーシャルスキルトレーニングについて、聴覚支援学校での活用方法を考える勉強会を2学期に設けた。

3学期に実施した2回目は、4年生より事例検討を行った。担任より現状や課題について資料回覧を行い、次年度に向けての支援のあり方について検討することができた。

3 研究活動の成果と課題

4年間かけて取り組みを行ってきた「主体的・対話的で深い学びの実現」について、独立行政法人教職員支援機構「アクティブ・ラーニング授業実践事例—ピクトグラム—」を基に授業実践の蓄積を行ってきた。それに伴い、学習会の内容を刷新し、講演を行うスタイルから教員が主体的に参加できるようにグループワークを中心に行ってきた。その中で、教員がどのような点に留意しながら授業を組み立てているのかについて考えることができた。また、聴覚支援学校に赴任して1年目の教員にとって多くのヒントを示すことができたと思う。課題としては、専門的な視点から講評をいただく機会があった昨年度と比べて、主旨がぼやけてしまっているようにも感じた。そのため今後もグループワークを中心に進めつつ、講師からの助言をいただくことも視野に入れたいと考える。

これまでの活動を振り返ってみると、4年間の研究活動の1年目には主体的・対話的で深い学びの基礎について教員の資質向上を図り、聴覚障がい児教育の中でどのように実践を行うことができるかを各自で考え、研究・公開授業を進めた。2年目からピクトグラムを活用して授業の展開を考え、その事例について蓄積を行ってきた。教科や場面が限定的な事例もあれば、授業全般に応用できる事例もあり、主体的・対話的で深い学びを実践する際の参考資料をまとめることができた(授業実践事例集(資料7))。これは、プレゼンテーションソフトを使用しているため、19の観点からの検索や、キーワードでの検索が可能になる。また、学年、教科ごとに検索できるようにすることで、三つの学びについて、より具体的なイメージをもって授業を組み立てることに寄与できると考える。しかし、その事例の検証まで至らなかったため、正確性に欠けるものも含まれると思われる。東京都立立川ろう学校での実践⁵⁾では、学習指導アドバイザーからの講評を行っていることが分かる。今後、授業実践においても校内だけでなく、外部よりアドバイザーを招聘しての研究活動を視野に入れて進めていきたい。

4年間の研究を通して、他障がいを専門に教育を行ってきた教員の異動が多く、聴覚障がい児教育の専門性の継承と向上に邁進したいと考えた。また、重複障がい児も増えてきている現状で、専門性の継承はより難しいものとなると考えられる。そこで次年度は、この4年間の研究活動をより発展させるために、授業実践事例の蓄積にとどまらず、教材や指導案の共有や蓄積を行うことも視野に入れて行いたい。その際、指導略案で記載する内容について、柔軟に改変していきたい。

参考文献

- (1) 独立行政法人教職員支援機構、2018、「アクティブ・ラーニング授業実践事例—ピクトグラム—」、<https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/pictogram.html>(2022年1月4日 最終確認)
- (2) 独立行政法人教職員支援機構、2017、アクティブ・ラーニング授業実践事例、岐阜大学教育学部附属小学校1年国語科、<https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/jirei133.html>(2022年1月4日 最終確認)
- (3) 独立行政法人教職員支援機構、2017、アクティブ・ラーニング授業実践事例、岐阜大学教育学部附属小学校5年音楽科、<https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/jirei95.html>(2022年1月4日 最終確認)
- (4) 大分県教育委員会、2018、新学習指導要領対応 小学校各教科等学習指導案様式(例)、道徳 [Word ファイル/206KB]
<https://www.pref.oita.jp/site/kyoiku/r2-shidouan-rei.html>(2021年4月16日 最終確認)
- (5) 大西孝志、2021、「ろう学校における主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善」、『ろう学校における主体的・対話的で深い学びの実践』、立川ろう学校ろう教育研究会編、ジーアス教育新社、39-45

資料1 独立行政法人教職員行政機構よりアクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
 興味や関心を高める	 互いの考えを比較する	 思考して問い続ける
 見通しを持つ	 多様な情報を収集する	 知識・技能を習得する
 自分と結び付ける	 思考を表現に置き換える	 知識・技能を活用する
 粘り強く取り組む	 多様な手段で説明する	 自分の思いや考えと結び付ける
 振り返って次へつなげる	 先哲の考え方を手掛かりとする	 知識や技能を概念化する
	 共に考えを創り上げる	 自分の考えを形成する
	 協働して課題解決する	 新たなものを創り上げる

資料4 (アドバイスシートA)

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 () 指導者 ()


















評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的 的環境 整備	1 児童は、授業の準備(教科書など)ができています。		
	2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		
	3 必要のない情報が目に入らないように工夫している。		
	4 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		
	5 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	6 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		
基礎的 な 指導 技術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 板書をわかりやすく工夫している。		
	3 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。		
	4 教材やワークシートを適切に活用している。		
	5 単元名が提示されている。		
	6 めあて(目標)を提示している。		
	7 色分けしたりして、見てわかる板書になっている。		
	8 視覚的教材を活用している。		
	9 導入を工夫している。		
	10 話す速さが適切である。		
	11 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	12 書かせるとき、話すときを区別できている。		
	13 児童の注目を集めてから話し始めている。		
	14 座り方や書き方の指導ができています。		
	15 児童に顔や口元が見えるようにしている。		
	16 児童に伝わりやすい方法(手話、指文字、音声など)で表現している。		
	17 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。		
	18 考えを発表したり書いたりする場面を有効に活用している。		
	19 児童が本時で学んだことを、自分のことばでまとめている。		
	20 児童がめあてを達成している		
ティ ー チ ン グ	1 授業の流れを把握し、次の活動が円滑に進むようサポートをしている。		
	2 児童に、指導者を見るよう促している。		
	3 必要なときに児童の指導助言をしている。		
発 展 的 な 指 導 技 術	1 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	2 授業の流れがわかるような工夫をしている。		
	3 時間配分がうまくできている。		
	4 教員が授業づくりに関して大切にしていることがある。		
その他			

記入者()

資料5 (アドバイスシート B)

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート					
年 月 日 曜日		時間目	教科 ()	授業者()	
チェック項目	✓	チェック項目	✓		
1 児童は、授業の準備(教科書など)ができています。		11 明確でわかりやすい指示や説明をしている。			
2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		12 児童に顔や口が見えるように注意している。			
3 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		13 児童に伝わりやすい方法(手話、指文字、音声など)で表現している。			
4 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		14 板書をわかりやすく工夫している。			
5 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		15 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。			
6 指導案が適切に作成されている。		16 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。			
7 導入を工夫している。		17 教材やワークシートを適切に活用している。			
8 めあて(目標)を提示している。		18 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。			
9 時間配分がうまくできている。		19 適切に授業のまとめをしている。			
10 話す速さが適切である。		20 T T (ティームティーチング)を適切に活用している。			
評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。					
項目	内容		評価	研究テーマに関連したアドバイス(気づいたこと)	
主体的な学び	1				
	2				
	3				
対話的な学び	1				
	2				
	3				
	4				
深い学び	1				
	2				
	3				
	4				
その他					
記入者()					

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
 <p>興味や関心を高める</p>	 <p>互いの考えを比較する</p>	 <p>思考して問い続ける</p>
 <p>見通しを持つ</p>	 <p>多様な情報を収集する</p>	 <p>知識・技能を習得する</p>
 <p>自分と結び付ける</p>	 <p>思考を表現に置き換える</p>	 <p>知識・技能を活用する</p>
 <p>粘り強く取り組む</p>	 <p>多様な手段で説明する</p>	 <p>自分の思いや考えと結び付ける</p>
 <p>振り返って次へつなげる</p>	 <p>先哲の考え方を手掛かりとする</p>	 <p>知識や技能を概念化する</p>
<p>資料7 (授業実践事例集)</p> <h2 style="text-align: center;">目次</h2> <p style="text-align: center;">キーワード検索の場合は キーボードのCtrl+fを押す</p> <p style="text-align: center;">~ +<</p> <p style="text-align: right;">独立行政法人教職員支援機構</p>		
 <p>自分の考えを形成する</p>		 <p>新たなものを創り上げる</p>



興味や関心を高める

目次へ

学年	教科	内容
6年	理科	BTB液を使った実験に取り組む。
6年	国語	ワークシートを使って、万葉仮名で書かれたことばを当てるゲームを行う。
4年	国語	これまで読んできた俳句を振り返り、好きな俳句を見つけた。
2年	国語	穴の役割について理解しやすくするために、五十円玉や百円玉など実物を用意し、触らせる。
1年	国語	イラストから身近な単語を考える。
1年	国語	パワーポイントを活用した読み聞かせを通じ、物語の全体像をつかませるとともに、イラスト文を本文欄に掲載することで音読(手話表現)の手がかりとさせる。
2年	国語	くっつきキャラクターカードに関心をもっている。
5年	国語	写真を掲示する。
4年	算数	問題解決方法を考える。
6年	社会	自分の意見を相手にわかるように説明する。
3年	理科	身の周りの物を使って進んで調べる。
1年	体育	友だちと一緒に楽しんで活動に取り組んでいる。
3年	外国語	英語やASLの表現に関心を持ち、文化の違いに気づく。
5年	外国語	他教科(家庭科)を想起させ、オリジナルメニューを作らせる。
6年	総合	自分の意見をまとめ、相手にわかりやすく説明する。
自立	言語	いろいろなことばを調べてイメージさせる。
自立	自立	できたことを称賛し、成功体験を積み重ね、学習意欲を高める。
自立	自立	視覚情報だけでなく、聴覚活用も行いながら口形模倣をさせたり、音韻に気をつけたりしながら自分で練習に取り組ませる。
自立	自立	口形図を見て、文字に結びつけさせる。

学年	教科	内容
自立	自立	身近な題材をテーマとして取り上げる。
自立	聴能	子どもたちが興味のある題材を取り上げる。
自立	発音	あいうえお体操に意欲的に取り組む。
自立	言語	身近にあることばから例を探させる。
重複	な活	指導者の話や友だちの活動を見て、したい役を選べるようにさせる。
重複	な活	見本を見せたり、制作方法を説明したりする。



見通しを持つ

目次へ

内容	
学年	教科
1年	国語
4年	国語
2年	国語
2年	国語
2年	算数
5年	算数
1年	算数
1年	算数
3年	算数
2年	算数
3年	算数
6年	算数
3年	算数
5年	理科
3年	体育
1年	道徳
3年	音楽
重複	な活

パワーポイントを活用した読み聞かせを通じ、物語の全体像をつかませるとともに、手話イラスト文を本文欄に掲載することで音読（手話表現）の手がかりとさせる。

家のつくりの工夫を考えながら音読する。

人物の行動を中心に想像を広げながら読む。

登場人物の気持ちを想像しながら、音読させる。

問題文から九九を活用することに気づき、本時のめあてを確認する。

答えを予想したり、問題を解決する方法を考えたりしている。

ロールプレイングを通して興味をもつ。

10のまとまりをつくるよさを感じ、本時のめあてを意識させる。

答えを予想して、問題を解決する方法を考えている。

九九を活用することで答えが求められる場面から、九九の構成に必要性に気づき、本時のめあてを意識させる。

既習の内容から解決方法の見通しをもたせる。

問題文の情報を整理してから課題に取り組ませる。

包含除の計算手順が、既習の等分除の手順と似ていることに気づかせ、本時の見通しをもたせる。

問題を解決する方法を考え、伝えようとする。

目標を設定してから取り組ませる。

本時で考えていく事柄について確認する。

基本的な練習後、「ゆうやけこやけ」「いちばん星みつけた」の演奏をすることで、見通しをもつ。

めあてや制作方法を説明する。



自分と結び付ける

目次へ

		内容
学年	教科	
1年	国語	パーポイントを活用した読み聞かせを通じ、物語の全体像をつかませるとともに、手話イラスト文を本文欄に掲載することで音読（手話表現）の手がかりとさせる。
5年	国語	学校や家庭生活の中での会話の場面を設定し、場面の中で、児童が普段どのようなことばを使用しているのかを振り返らせる。
6年	道徳	自身の問題として捉え、自分にできることを考えさせる。
1年	生活	冬の特徴に気づくために、日常生活を思い出させる。
6年	家庭科	学校や家庭で行う正装を思いだし、考えさせる。
自立	聴能	聴覚に障がいがあると受けることができる福祉制度について知り、自分の学校や家庭での生活と照らし合わせる。
自立	自立	自分自身が目指す生き方や社会とSDGsの目標を照らし合わせる。
自立	自立	日々の生活体験とつなげながら課題について考えさせる。
自立	聴能	相手にわかりやすく伝える方法を理解し、発表することができる。
自立	自立活動	自己の生活を振り返り、意欲的に活動に取り組んでいる。
4年	道徳	ロールプレイの体験を通じ、進んで親切な行動を行おうとする。
1年	算数	色板を使っていろいろな形を構成したり、色板をずらしたり、回したり、裏返したりして、形を変形することができる。
1年	道徳	嘘つかれた側の気持ちを考えさせることができる。
4年	理科	体の中で曲げられるところはどこかを、触ったりしながら観察していく。



粘り強く取り組む

目次へ

学年	教科	内容
6年	算数	答えが出るまで、いろいろな測り方の組み合わせを考える。
自立	発音	ヒ音の発音要領を理解し、発音する。
3年	音楽	友だちと相談しながら音符を組み合わせ、新しい一つの337拍子を作成して発表する。
1年	算数	最後まで問題に取り組むことができる。
自立	発音	正しい発声の感覚を習得する。
3年	国語	ことばの意味を知り、本文を音読することができる。
6年	算数	方眼紙やプログラムを使い、粘り強く取り組んで自分のイメージする拡大図、縮図を作図できる。
3年	国語	本文を読み、キーワーを抜き出すことができる。
2年	算数	かけ算の式はたし算を使うと求められることができ、ことに気づくことができる。
4年	国語	積極的に自分の意見を述べべたり、友達の意見を聞いたりして、活発に意見交流をすることができ。



振り返って次へつなげる

目次へ

学年	教科	内容
4年	国語	前時のヤモの家族やふるさとに対する気持ちを振り返って、本時につなげる。
4年	算数	(2位数)×(1位数)の計算の仕方を考える。
2年	生活	本時で見えた課題や反省を次にかかしてよりよい作品を創り上げる。



互いの考えを比較する

目次へ

学年	教科	内容
4年	国語	友だちの発表をきき、感じ方の違いに気付く。
1年	国語	考えた単語から文章を作り、発表する。
4年	国語	ヤモの家族やふるさとに対する気持ちについて話し合う。
4年	国語	読み取った内容を筆者に観点に分ける。
5年	国語	例題に対する考えをグループで話し合わせる。
2年	国語	登場人物の様子がわかることを確認し、気持ちを考えさせる。
5年	国語	作成したポスターを用いて、お互いの考えを知る。
5年	算数	相手の考えを知り、自分の考えとの相違点に気づかせる。
4年	算数	相手の考えをきき、自分の考えとの違いについて考える。
3年	算数	他の人の意見をきき、自分の考えと比べる。
6年	算数	互いの考え方の違いに注目させる。
6年	社会	相手の考えを傾聴し、自分の考えと比較する。
3年	理科	友だちが調べたことをきき、自分の調べた結果と比べる。
6年	総合	相手の考えを傾聴し、自分の考えと比較する。
自立	自立	発表を行うことで、自分自身の考えを振り返ったり、新たな課題を見つけたりする。
自立	自立	課題解決に向けて話し合いをする。
2年	生活	友だちのつくったおもちゃの良いところやより良くてきるところを教え合いながら改良していく。



多様な情報を収集する

目次へ

		内容
学年	教科	
6年	国語	友だちのつぶいやくややきや指導者のことばかけ、板書から答えを導き出し、発表させる。
2年	国語	穴の役割や穴があいている理由について、手話イラスト付きの教材や、実物を活用しながら読み取らせる。
5年	国語	教科書に書かれている文章や図などの資料から情報を収集する。
1年	体育	自身の動きに、見本や友だちの動きを見て得たことや分かったことをいかそうとしている。
3年	体育	自分や他者の課題、良い点を見つけるようにする。
3年	外国語	出てきた映像は何であるかに気づき、答えようとする。
1年	道徳	友だちの意見を知ること、自己の考えを広げたり、深めたりする。
6年	道徳	友だちの意見を知ること、自己の考えを広げたり、深めたりする。
自立	自立	インターネットなどで調べ学習を行い、発表に必要な情報を収集する。
自立	言語	知っていることばや調べたことばを、やりとりによって分けあわせる。
自立	自立	手話、指文字、音声、視覚教材などを活用して指導者の指示を理解させ、実践させる。
自立	言語	友だちのつぶいやくやきや指導者のヒントから、ことばの例を思い付いたり、教えてもらったりする。
重複	な活	自分の作品の紹介をさせ、友だちの作品紹介をきかせる。



思考を表現に置き換える

目次へ

学年	教科	内容
1年	国語	友だちの音読(手話表現)を見て、自分の表現の参考にさせ、友だちといっしょに動作かし、演じることで内容を理解させる。
2年	国語	“で(手話表現:場所)”を使った文にあう手話表現をしている。
2年	国語	えっちゃんの強い思いを吹き出しに書いている。
2年	国語	1場面の挿絵とがまくんの会話文を比較し、発表させる。
2年	算数	九九の構成の仕方を自分のことばで説明する。
1年	算数	数の数え方や表し方を自分のことばで説明する。
3年	算数	自分の考えをまとめ、発表する。
3年	算数	等分除と包含除の手順が分かる写真を対比させ、その違いから包含除の計算式を発表させる。
5年	外国語	自分の思いや考えをASLや身体表現などで表させる。
3年	音楽	歌詞から曲のイメージを持たせ表現させる。
6年	家庭科	なぜ清掃を行うのか自分の考えをワークシートに書く。
自立	言語	自分のイメージを自分のことばで説明させる。
自立	自立	考えたことを話したり、動作化させたりする。
自立	聴能	手話、指文字、音声などいろいろな表現手段を用いて、わかりやすく伝える方法を考え、やりとりをする。
重複	な活	自分の頑張ったところ発表させる。
重複	な活	友だちの演技を見て、感じたことやよかったところを発表させる。



多様な手段で説明する

目次へ

		内容
学年	教科	
5年	外国語	相手を意識して、効果的な伝え方を考えさせる。
自立	聴能	相手に合わせたコミュニケーション手段で病院や役所、補聴器店等とのやりとりをする。
自立	聴能	手話、指文字、音声などいろいろな表現手段を用いて、わかりやすく伝える方法を考え、やりとりをする。
自立	言語	友だちに自分の意見を伝え、書記させる。
自立	言語	問題解決のために、いくつかの手段を考えることがができる。
自立	聴能	磁石の場所を伝え合って、シートを完成することがができる。
3年	国語	自分の考えを自分なりの表現で教員や友だちに伝えることができる。
2年	算数	自分の考えを自分なりの表現で教員や友だちに伝えることができる。
1年	算数	自分の考えを教員や友だちに伝えることができる。
1年	道徳	発表を通して、他者の気持ちに気づくことができる。



先哲の考えを手掛かりとする

目次へ

学年	教科	内容
6年	国語	被災者の話を見たりきいたりし、自分の防災への考えを形成させる。
6年	社会	資料などを手掛かりとし、友だちと相談しながら課題解決につなげることができる。
2年	算数	角や辺などの特徴を友だちの発表や自らの考えで気づくことができる。



共に考えを創り上げる

目次へ

		内容
学年	教科	
1年	算数	実際に日常で経験するであろう、人数が増えたり減ったりする場面を演じ、相談しながら進める。
6年	総合	互いに相談しながら答えを考える。
自立	言語	友だちと意見を交換して、まとめていく。
3年	音楽	友だちと相談しながら音符を組み合わせ、新しい一つの337拍子を作成して発表する。
5年	国語	戸の中かからきこえる山猫たちの声をきいた紳士たちの気持ちや紳士たちの恐怖心が高まっていることに気が付いている。
5年	国語	友だちと意見交換をし、わかりやすい文にまとめている。
自立	自立活動	自分や友だちの良さを多様な見方で捉えている。
4年	国語	積極的に自分の意見を述べたり、友達の意見を聞いたりして、活発に意見交流をすることができている。



協働して課題解決する

目次へ

		内容
学年	教科	
1年	国語	友だちの音読(手話表現)を見て、自分の表現の参考にさせ、友だちとしっかりと動作かし、演じることで内容を理解させる。
3年	算数	グループで協力して、課題の答えを見つけている。
6年	算数	いろいろな測り方を考え、発表する。また、友だちの発表に耳を傾ける。
5年	理科	グループで実験を行い、結果からわかったことを話し合う。
6年	理科	実験結果を共有し、相談しながら結果をまとめる。
1年	生活	わからないときには、友だちや先生の意見やヒントをもとにさせる。
自立	発音	おとつとの形当てに友だちと協働して取り組む。
自立	言語	友だちと協力して、たぐさんのことばの例を集める。
自立	言語	友だちと相談しながら、課題解決をしていく。
4年	算数	(2位数)×(1位数)の計算の仕方を考える。
3・4年	体育	ペアの人と互いに動きを確認し、運動の楽しさを共有する。互いに相手の動きの良い点、気になる点を見つけて、伝え合うことができる。
4年	道徳	他の児童の行動をみて、どうすればいいか考える。



思考して問い続ける

目次へ

		内容
学年	教科	
1年	道徳	自分ならどうするかを考え、今後の日常生活においても本時で考えたことを実践しようとする態度を身につける。
6年	道徳	今後の学校生活でも取り組みを続け、身につけさせる。
6年	総合	物事を多角的に捉えられるようにする。
自立	言語	一回解決したらこれで終わりでではなく、またいろいろな課題があることに気づく。
自立	聴能	活動をふりかえることができる。
自立	自立活動	自己の生活をより良くしようと考えている。
1年	道徳	嘘をつくことについて考えることができる。



知識・技能を習得する

目次へ

学年	教科	内容
6年	国語	ワークシートを使って、万葉仮名を読んだり書いたりする。
1年	国語	4つのまとまりのことは考える。
5年	国語	3種類の敬語と使い方を伝える。
2年	国語	“で(手話表現:場所)”の使い方を知る。
5年	国語	文や文書うにはいろいろな構成があることを知る。
3年	算数	グループで話し合ったことを理解し、発表している。
6年	算数	新しい組み合わせ方によって、問題を解決できる。
6年	社会	ペア活動で話し合ったことを理解し、発表している。
6年	理科	水溶液それぞれの性質を理解する。
1年	体育	跳び方の改善を重ね、なわを跳べるようになる。
3年	体育	基本技の練習を通して、上がり系や下り系の技に発展できるようにする。
3年	外国語	新出の英語やASLの表現を使って答える。
3年	音楽	音穴の閉じ方や運指、タンギングの使い方など基本的な技能を使って、きれいな音色で演奏する。
1年	生活	冬の特徴を見分けるとともに、季節ごとの特徴の違いに気づかせる。
6年	家庭科	清掃する目的を理解し、汚れの種類を知る。
自立	聴能	補聴器購入の手続きのおおまかな手順を覚え、病院や役所、補聴器店等とのやりとりの模擬体験を通して、実生活で活用できるように見直しをもつ。
自立	言語	自身で調べたり、問題に答えたりすることで知識を身につけさせる。
自立	聴能	指導者からの助言や、友だちとのやりとりを通じて、いろいろな伝え方を知り、実際の場面で活用する。
自立	言語	名詞の特徴、種類を知る。



知識・技能を活用する

目次へ

学年	教科	内容
1年	国語	4つのもまとまりのことばから文章を作る。
1年	国語	学習場面とは別の機会に学習したことばを活用させる。
4年	国語	セネガルの家について考えたことを発表する。
5年	国語	学習した敬語を、例題の中で活用させる。
5年	国語	資料を適切に選び、活用する。
2年	算数	九九の性質やきまりを既習のことばでまとめる。
1年	算数	既習内容を活用して学習に取り組ませる。
4年	算数	整数の計算に帰着できるようにする。
2年	算数	既習の内容を活用して課題に取り組ませる。
3年	算数	方法を知り、実際の場面で活用する。
6年	算数	既習の内容を活用して課題に取り組ませる。
3年	体育	基本技の練習を通して、上がり系や下り系の技に発展できるようにする。
5年	外国語	店員役と客役に分かれて、やり取りをさせる。
自立	発音	ヒ音を使った文章を作り、発音要領を意識しながら発音する。
自立	言語	調べたこと、知っていることを文作りにつなげさせる。
自立	聴能	指導者からの助言や、友だちとのやりとりを通じて、いろいろな伝える方法を知り、実際の場面で活用する。
自立	言語	自分の知っていることばから名詞を探し、集める。



自分の思いや考えと結び付ける

目次へ

学年	教科	内容
2年	国語	手紙をもらったときの自分の気持ちを考えさせる。
4年	国語	積極的に自分の意見を述べたり、友達の意見を聞いたりして、活発に意見交流をすることができる。



自分の考えを形成する

目次へ

		内容
学年	教科	
2年	国語	学習したことを振り返りながら、五十円玉に穴があいている理由について説明させる。
4年	国語	ヤモの家族やふるさとに対する気持ちについて自分の考えをまとめめる。
2年	国語	文章の内容と自分の経験を結び付けて考えをまとめ発表し合う。
2年	国語	もらった手紙と見比べて、友だちが幸せな気持ちになったら自分もうれしい気持ちになることを考えさせる。
5年	理科	問題に対して、わかったことを自分のことばでまとめめる。
自立	自立	情報収集や意見交換などの活動の中で考えを深め、自分自身が目指す「サステナブルな社会」を提案し、発表する。
自立	自立	友だちの意見をきいたりしながら、自分はどう考えるかを発表する。



新たなものを創り上げる

目次へ

学年	教科	内容
3年	音楽	友だちと相談しながら音符を組み合わせ、新しい1つの337拍子を作成して発表する。
2年	生活	自分たちで作ったおもちゃをさらによいものにする中で、自分だけのおもちゃを創り上げていく。

自ら考え創造する力を育むろう教育とは
～主体的・対話的で深い学びの視点から～

中学部

1 はじめに

本年度より中学校における学習指導要領が全面的に改訂・実施されることになり、授業における「主体的・対話的で深い学び」が強く求められている。本校では、平成30年度より「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」を研究テーマに設定している。中学部においても、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けて、様々な取り組みを行ってきた。一昨年度の研究（総合的な学習の時間における主体的な取り組み）では、「生徒が他学年とともに取り組み、『発表』までの過程で調べたり、他の人の考えを知ったりすることで「深い学び」に貢献すること」を確認した。昨年度の研究（教科で取り組む、主体的・対話的で深い学びについて）では、「生徒同士で考え、答えを探し、情報を共有することで、自ら主体的に取り組む姿勢を養うことができること」を報告した。本年度も引き続き、各教科での取り組みや学年縦割りの活動に加え、生徒を対象に「学びのアンケート」（資料2、3参照）をとり、学校生活全体における生徒一人ひとりの学びに向かう姿勢や行動の変化を分析した。そこから、中学部の今後の課題を明らかにしていきたい。

2 研究活動～成果と課題～

1) 学部内研修

本年度は、中学部では学部内研修（以下、部内研）を2か月に1回程度実施した。その目的は、生徒の実態把握や聴覚障がい教育の専門性向上、教員間での情報共有である。

表1

日程	テーマ	内容
5月21日（金）	きこえない子どものコミュニケーションとアイデンティティ	様々な事例をもとに、きこえない子どもに起こりうる問題について考えあう。
7月7日（水）	性教育と多様な性	本校赤木校長を講師として、性教育や多様な性について学ぶ。
9月29日（水）	こんなアプローチはどう？ ～一人ひとりに焦点をあてて～	生徒一人ひとりの行動に焦点をあて、その子のねがいを話し合う。
11月26日（水）	各教科における主体的・対話的で深い学び	各教科の取り組みを報告し合い、「主体的・対話的で深い学び」の実現について振り返る。（FT：中学部 中谷拓詞 教諭）

FT:ファシリテーター

部内研の企画、実施は研究部にとって初めての試みだったため、手探り状態で進めてきたが、「教員同士で話し合い、考えあう」雰囲気づくり、そして生徒にとってより良い教育環境づくりにつながることができたと感じる。一方で、中学部教員の専門知を高めることや日ごろの学習・生活指導へつなげる研修にまでは至ることができていない。次年度以降は、校内だけでなく校外からも講師を招き、連続的な講座を企画するなど、研修の一貫性をもたせながら質の向上をめざしていきたい。

2) 研究授業

中学部では、年次研修者による研究授業を本年度は計6名行ってきた。研究授業は、授業者の子ども理解や授業の質の向上をめざして行われるものであるが、同時に、中学部全体の授業力向上をはかるものとしても機能するように計画した。具体的には、「研究授業のビデオ検証実施」や「アドバイスの改善」である。

「ビデオ検証」は、初任者研修および教育実習生に対して行った。授業全体をタブレットで撮影し、協議会においてビデオを見ながら、「良かった点」や「改善できる点」を話し合った。これによ

り、教員の立ち位置や手話の見やすさを細かく確認し、より良い授業の進め方について意見を出し合いながら考えることができた。また、研究授業を見学できなかった教員も協議会に参加することができる利点もあった。

次に、「アドバイスシートの改善」について述べる。以前より、アドバイスシートを活用しながら授業の評価を授業者にフィードバックする方法をとってきた。本年度の初めに、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れ、シートの改善を行った（資料1参照）。どのようなことを意識して授業づくりをすればいいかを明確にすることができた一方で、アドバイスシートを書いて授業者に還元する段階にまで至らなかった。ICTの活用方法も含め、より良い方法を探っていきたい。

3 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～中学部の取り組み～

中学部の総合的な学習の時間（以下、総合学習）では、平成31年度よりSDGs学習に取り組んでいる。外部の講師を招いて「SDGs 2030 カードゲームカード研修」を行い、17の目標に沿ってグループで課題を解決する取り組みを進めた。その取り組み内容はグループごとに異なる。あるグループでは、不要になった衣類を用いてエコバッグを作製した。別のグループではペットボトルを活用してコースターを作るなどゴミを減らす取り組みを進めた。

また、委員会活動では、本年度より「プロジェクト委員会」を新たに導入した。4つの委員会（プロジェクト委員会、学級委員会、広報委員会、安全衛生委員会）と生徒会をおいた。学期に2回から月に1回に回数を増やし、また、委員会における人数を4～5人に減らすことで意見を言いやすくする環境づくりに努めた。そのことにより、生徒が自ら企画を考え、実行する姿が多くみられた。

4 結果と考察

生徒の「学びのアンケート」を2回実施し、5月と12月に行った。1回目は、総合学習や委員会活動が始まる前にアンケートをとった。

1) 質問項目

表2-①【自分について】

四件法（4：よくある 3：時々ある 2：あまりない 1：全くない）を用いた。

1	疑問に思ったことを調べたり質問したりしたことはありますか？
2	話し合う活動を通じて自分の考えが広がったり深まったりしたことはありますか？
3	前に学習したことを使って考えたり課題を解決したりしたことはありますか？

表2-②【グループ活動について】

四件法（4：そう思う 3：少し思う 2：あまり思わない 1：全く思わない）を用いた。

4	他者とともに考えをつくりあげて進めることは大事だと思う。
5	自分が感じたことや気づいたことは積極的に表現するほうがよい。
6	話し合い活動では、自身の考えだけでなく他者の考えも取り入れたほうがよい。
7	自分の考えを説明する際は、あらゆる方法で表現・発表するほうがよい。

2) 回答の集計結果

問いの文言と答え方を易しくした形式のアンケート用紙（資料3）も同時に配付し、生徒自身が答えやすい用紙を選ぶ形をとった。

表3 回答者数

	全体回答者	1年生	2年生	3年生
1回目（5月）	28	13(5)	5(2)	10
2回目（12月）	26	12(8)	5(2)	9

（ ）内の数字は易しいバージョンのアンケート用紙を選んだ生徒数。

3) 生徒自身の学びに向かう姿勢の変化

生徒のアンケートの結果から考察できることを述べていきたい。なお、アンケートにおける生徒の記述コメントについて、1回目のコメントを「」、2回目のコメントを『』でくくるものとする。

る。

① 質問項目 1 疑問に思ったことを調べたり質問したりしたことはありますか？

図 1-①に示したように、1 回目から 2 回目にかけて、肯定的な回答が増加した。このことは、聴覚支援学校の特性もあるが、生徒と教員間に「質問しやすい雰囲気」が存在することが要因と考えられる。生徒の記述コメントには、「授業でわからない言葉や方法がわからないとき。』『勉強でもっと知りたいと思ったとき。』とあり、学習面において主体的な態度をもって調べ、質問することが多いとわかる。一方で、生活場面における記述はみられなかったが、「学びのアンケート」というタイトルを見て、書かなかった可能性もあり、今後調査していきたい。

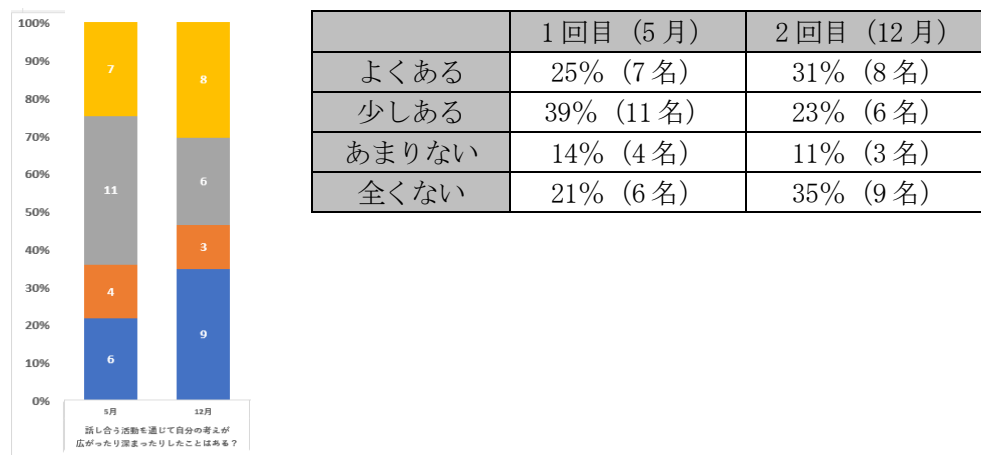
図 1-①



②質問項目 2 話し合う活動を通じて自分の考えが広がったり深まったりしたことはありますか？

質問項目 2 においては、図 1-②の通り、1 回目と 2 回目ともに肯定的な回答が 5 割以上に及んでいるが、2 回目にかけてやや減少している。「総合、道徳でグループで話し合いしている。」「SDGs での調べ学習」など、学年縦割りでのグループ学習の場面をあげる生徒が多くみられた。その中で、「自分には思いつかなかったとき。」「この考え方もあると深まったりする。」と自分の思考の広がりを実感する生徒もいた。2 回目での肯定的な回答の減少の理由については、後述する。

図 1-②

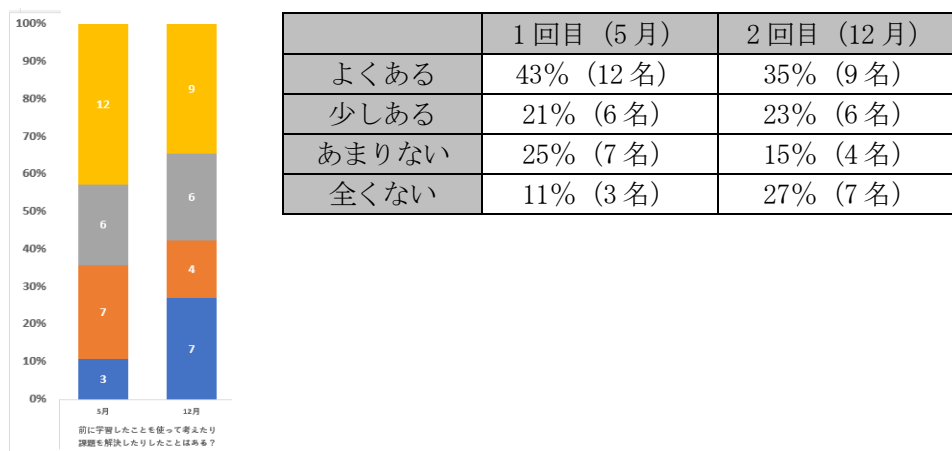


③質問項目 3 前に学習したことを使って考えたり課題を解決したりしたことはありますか？

図 1-③の通り、質問項目 2 と同様の傾向が表れており、2 回目にかけて肯定的な回答の割合が減少している。肯定的な回答を行った生徒の記述コメントには、「数学の授業」(5 件)と答える生徒が多く、数学科の特性上、学んだ知識を用いて課題を解決する実感をもちやすいと考えられる。また、「道徳」(3 件)と答える生徒も散見された。さらに、「買い物」や「物づくり」という意見もあり、日常生活での課題解決力にもつながっている生徒もいることがわかる。「話し合い活動」と答える生徒(3 件)

もおり、対話的な学習において前に学んだことを活かそうとする姿勢が身につけていることも認められた。

図 1-③



4) 対話の姿勢と意見の深化をめざして

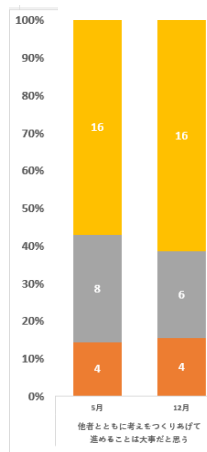
本調査における総合的な結果として、中学部の生徒が「主体的」「対話的」な姿勢を身につけ、その大切さを感じながら学習や生活に向かっていることがわかった。しかしながら、「自分の考えを広げたり深めたりすること」や「前に学習したことを使って課題を解決すること」にはつながっていない生徒が多くみられたことも課題としてあがった。

図 1-⑤、⑥、⑦に示した通り、質問項目 5, 6, 7 においてはいずれも肯定的な回答の割合が増加している (図 1-④はほぼ横ばい)。他者の考えを取り入れながら、ともに考えをつくりあげていく意識が生徒に内在していることがわかる。このことは、先述の通り、学年縦割りの活動や授業での取り組みによって、そうした経験を多くもたせ、より良い方法を考えあう大切さに気づいたことが要因と考えられる。実際に、『一人で作り上げると失敗したとき原因がわからなくなる』『自分の考えだけだと視野が狭くなるから』といった意見がみられた。

他方で、「話していることがわからない。」「世界観が違う人とペアになると大変』『イメージを共有するのがむずかしい』『一人の考えも大切だと思う。』『自分で思い通りにする方がいい』といった否定的な意見も散見された。中学部に在籍する生徒一人ひとりのきこえの程度や生活環境は異なる。それゆえに、アイデンティティの差異やコミュニケーションモードの違いにより、対等な話し合いがうまれにくいという課題が存在する。また、少人数集団において、生徒の関係が固定化し、様々な意見が集まりにくい場面も生じている。そのことから、互いに伝わる方法を探り、自分の意見や考えを伝えていく姿勢をもたせることが今後の指導上における課題である。また、様々な意見や考えをもつ人がいることを認め、お互いに理解できているか確認しながら、意見を形成する姿勢をもたせていくことも引き続き中学部として必要になる認識である。

質問項目 4 他者とともに考えをつくりあげて進めることは大事だと思う。

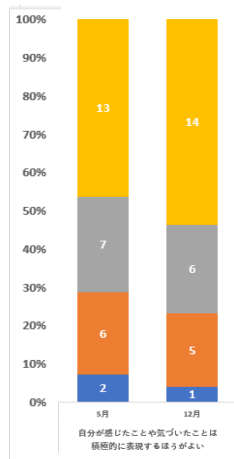
図 1-④



	1回目 (5月)	2回目 (12月)
そう思う	57% (16名)	62% (16名)
少し思う	29% (8名)	23% (6名)
あまり思わない	14% (4名)	15% (4名)
全く思わない	0% (0名)	0% (0名)

質問項目 5 自分が感じたことや気づいたことは積極的に表現するほうがよい。

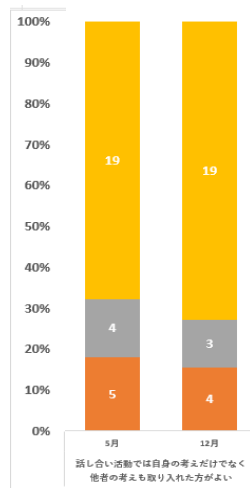
図 1-⑤



	1回目 (5月)	2回目 (12月)
そう思う	46% (13名)	54% (14名)
少し思う	25% (7名)	23% (6名)
あまり思わない	21% (6名)	19% (5名)
全く思わない	7% (2名)	4% (1名)

質問項目 6 話し合い活動では、自身の考えだけでなく他者の考えも取り入れた方がよい。

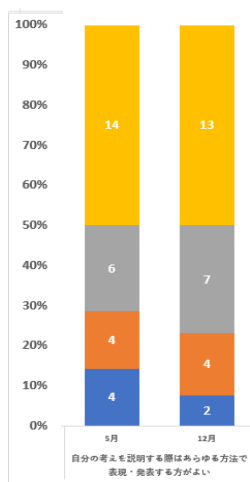
図 1-⑥



	1回目 (5月)	2回目 (12月)
そう思う	68% (19名)	73% (19名)
少し思う	14% (4名)	12% (3名)
あまり思わない	18% (5名)	15% (4名)
全く思わない	0% (0名)	0% (0名)

質問項目 7 自分の考えを説明する際は、あらゆる方法で表現・発表する方がよい。

図 1-⑦



	1回目 (5月)	2回目 (12月)
そう思う	50% (14名)	50% (13名)
少し思う	21% (6名)	27% (7名)
あまり思わない	14% (4名)	15% (4名)
全く思わない	14% (4名)	8% (2名)

5 まとめと今後の課題

本校は、聴覚支援学校としては比較的大規模校であり、学年によって異なるが、グループ単位での活動を展開することができている。しかし、今後、生徒数が減少していくことが予想されており、対話的な学習の確保が難しくなることが想像される。きこえにくい・きこえない子どもたちが、自ら考え創造する力を育むために、今回のアンケート結果からもわかるように、グループの中で様々な意見に触れ、課題解決をめざす場面をつくっていくことが今後も必要である。どのような方法でそれが可能になるのかを私たちは考えていかなければならない。

最後に、アンケート調査にて、「自分が成長したと思う出来事がありますか」と任意の自由回答欄を設けたところ、複数の生徒の回答があった。そこには、「わからないことがわかるようになった」(6件)といった回答が多く、生徒の中で、「わかること」が成長の実感につながっていると再確認できた。そうした場面を私たち教員は見落とさずに一つひとつ丁寧に捉え共感していきたい。また、「自分の意見を積極的に言えるようになった」(4件)といった意見もあり、やはり主体的・対話的な姿勢が生徒の中に育ってきていることが認められる。他に、「台本で劇が成功したり、賞が取れたこと」や「自分の長所を見つけられた」、「手話を覚え、話せたこと」などもあり、学校生活の中で生徒一人ひとりが充実感をもって成長できていると確認することができた。

今後は、「主体的・対話的で深い学び」を授業の中でどのようにしかけ、どのように評価していくのかを研究していきたい。そして、そもそもきこえにくい・きこえない子どもにとって「主体的・対話的で深い学び」はどのような力になるのかを中学部全体で検討していきたい。

(資料1)

授業アドバイスシート

令和3年度 中央聴覚支援学校 中学部

日時	月	日()	限	教科		授業者	
----	---	------	---	----	--	-----	--

(4 よくあてはまる 3 ややあてはまる 2 どちらかというあてはまらない 1 あてはまらない)

		内容	評価	
授業 の 工夫	1	指導案	生徒の実態やこれまでの学習状況を把握できている。	4 3 2 1
	2		生徒の実態に即し、指導のねらいを明確にしている。	4 3 2 1
	4	ICTや視聴覚教材を効果的に活用している。		4 3 2 1
	5	生徒がわかる言葉で指示や説明、発問をしている。		4 3 2 1
	6	導入、展開、まとめがあり、中心となる活動が明確になっている。		4 3 2 1
主 体 性 の 工 夫	7	本時の流れなどを説明し、学習に向かう環境を整えている。		4 3 2 1
	8	生徒の実態に即し、興味をもって取り組める教材を選択している。		4 3 2 1
	9	生徒の気づきや学びを引き出す働きかけをしている。		4 3 2 1
	10	生徒が自分で考えようとする時間を設定している。		4 3 2 1
	11	生徒が考えたことを言葉にする活動を取り入れている。		4 3 2 1
対 話 性 の 工 夫	12	教員は生徒同士の手話が見えるように意識している。		4 3 2 1
	13	生徒に口形や表情、手話が見えるように立ち位置を意識している。		4 3 2 1
	14	生徒が発言しやすい環境をつくっている。		4 3 2 1
	15	ペア学習やグループ学習など学習形態の工夫をしている。		4 3 2 1
	16	生徒に答えを説明させたり、考えを発表させたりする機会を設けている。		4 3 2 1
ま と め	17	本時のねらいが達成できたかどうか確認し、肯定的に評価している。		4 3 2 1
	18	本時の学習が次の学習や日常生活につながるよう言葉かけしている。		4 3 2 1
	19	言葉や概念が定着するために多様な工夫を取り入れている。		4 3 2 1
	20	生徒一人ひとりが満足感や達成感を味わっている。		4 3 2 1

良かった点

改善できる点

(資料2)

中学部 学びのアンケート

〈 年 月 日記入〉

名前 ()

これは、皆さんの一年間の「学びの成長」を知るためのアンケートです。

質問を読み、それぞれ当てはまるものに○をつけましょう。

【自分のことについて】

4 : よくある 3 : 時々ある 2 : あまりない 1 : 全くない

4 「よくある」、3 「時々ある」と答えた人は、その下の「例 (どんな時?)」にも答えてください。

疑問に思ったことを自分で調べたり、質問したりしたことはありますか。	4	3	2	1
例 (どんな時?)				
話し合う活動を通じて、自分の考えが広がったり深まったりしたと思うことはありますか。	4	3	2	1
例 (どんな時?)				
前に学習したことを使って、考えたり課題を解決したりしたことはありますか。	4	3	2	1
例 (どんな時?)				

【グループ活動について】

4 : そう思う 3 : 少し思う 2 : あまり思わない 1 : 全く思わない

あなたが選んだ理由をその下にご記入ください。

他者とともに考えを作りあげて進めることは大事だと思 う。	4	3	2	1
そう思う理由				
自分が感じたことや気づいたことは積極的に表現するほ うがよい。	4	3	2	1
そう思う理由				
話し合い活動では、自身の考えだけではなく他者の考えも 取り入れたほうがよい。	4	3	2	1
そう思う理由				
自分の考えを説明する際は、あらゆる方法で表現発表する ほうがよい。	4	3	2	1
そう思う理由				

【最後に】

授業や学校生活において自分が成長したと感じる出来事がありますか？

あれば、記入してください。

	名前
年	日
月	前

中学部 まなびのアンケート

あなたの一年間の「学びの成長」を知るためのアンケートです。下の質問を順番に読んで読んで答えましょう。

No.	ききたいこと	あてはまるのはどれ？	「ある」と答えた人→どんなとき？
1	わからないことを自分で調べたり、質問したことがある。	ある ・ ない	
2	話し合う活動の時に、「もっと知りたい」と思ったことがある。	ある ・ ない	
3	勉強したことを使って、問題を解決したことがある。	ある ・ ない	
	ききたいこと	あてはまるのはどれ？	なぜそうおもった？
4	友だちと協力して進めることは大事だと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
5	きづいたことや考えたことは、自分から発表したほうが良いと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
6	自分の意見だけでなく友だちの意見も大事だと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
7	自分の考えを発表する方法は、いろいろあった方が良いと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	

年 月 日	名 前
-------	-----

中学部 まなびのアンケート

あなたの一年間の「学びの成長」を知るためのアンケートです。下の質問を順番に読んで答えていきましょう。

	ききたいこと	あてはまるのはどれ？	「ある」と答えた人→どんなとき？
1	わからないことを自分で調べたり、質問したことがある。	ある ・ ない	
2	話し合う活動の時に、「もっと知りたい」と思ったことがある。	ある ・ ない	
3	勉強したことを使って、問題を解決したことがある。	ある ・ ない	
	ききたいこと	あてはまるのはどれ？	なぜそうおもった？
4	友だちと協力して進めることは大事だと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
5	きづいたことや考えたことは、自分から発表したほうがいいと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
6	自分の意見だけではなく友だちの意見も大事だと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	
7	自分の考えを発表する方法は、いろいろあった方がいいと思う。	<input type="radio"/> はい <input type="radio"/> どちらでもない <input type="radio"/> いいえ	

新型コロナウイルス感染拡大防止対策下での学校教育の情報化

—ICT を活用した主体的・対話的で深い学びの実践から—

高等部 数学科 札谷美奈江

はじめに

まずは、本稿の目的となる法条文と学習指導要領の必要部分について確認しておく。

令和元年6月28日施行の『学校教育の情報化の推進に関する法律』には、基本理念として「第3条 学校教育の情報化の推進は、情報通信技術の特性を生かして、個々の児童生徒の能力、特性等に応じた教育、双方向のある教育等が学校の教員による適切な指導を通じて行われることにより、各教科等の指導等において、情報及び情報手段を主体的に選択し、及びこれを活用する能力の体系的な育成その他の知識及び技能の習得等が効果的に図られるよう行われなければならない」とある。さらに同条3項には「学校教育の情報化の推進は、すべての児童生徒が、その家庭の経済的な状況、居住する地域、障害の有無等にかかわらず、等しく、学校教育の情報化の恵沢を享受し、もって教育の機会均等が図られるよう行われなければならない」と定めている。第14条においては、国の責務とともに、情報通信技術を活用した効果的な教育方法の普及、改善及び充実にかかる学校教職員の資質の向上も定めている。

また、平成30年特別支援学校学習指導要領解説は「特に、特別支援学校においては、児童生徒の学習を効果的に進めるため、児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じてコンピュータ等の教材・教具を創意工夫するとともに、それらを活用しやすい学習環境を整えることも大切である。」とし、「これらのコンピュータ等の教材・教具を有効、適切に活用するためには、教師はそれぞれの教材・教具の特性を理解し、指導の効果を高める方法について、絶えず研究するとともに、校内のICT環境の整備に努め、児童生徒も教師もいつでも使えるようにしておくことが重要である。(句読点原文のまま)」¹としている。

少し長くなったが以上からは、学校教育の情報化において重要なことは、個々の児童生徒の実態に合わせた教育のなかで特に教科等の指導等において情報活用能力を育成すること、そしてそれが学校の教員による適切な指導を通じて行われること、そのためには教材・教具の創意工夫など学校教員の資質の向上が必要であること、の三点に要約されよう。これらはおのおの独立するものではなく、それぞれ密接に関連付けられる。

よって本稿では、これらを視座に、ICT を活用した授業の先行研究を概観し、次に新型コロナによる社会的な状況変化とそれによる情報通信技術を活用した遠隔授業の実態として本校高等部の取り組みを紹介していく。

1 新型コロナ以前の ICT を活用した授業実践

代表的な先行研究としては、文部科学省『主体的・対話的で深い学びの実践に向けた ICT 活用のあり方と質的評価』²があげられる。これは平成29年度 ICT 活用推進校の取組の13事例より「主体的・対話的で深い学びを実現するため、1単位時間ではなく、単元等の学習のまとまりの中で、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」³を働かせる学習活動において、ICT をどのように活用できるのかについて検証」した成果報告書である。が、残念ながら「本報告書では、算数数学について、「D データの活用」領域における統計的探求プロセスを明示したが、本事業では該当する実践事例収集ができなかったため学習過程のみ提示」⁴とされている。そのため参考となるのは「主体的・対話的で深い学びを実現するため」には「1単位時間ではなく、単元等の学習のま

¹ 文部科学省 「特別支援学校学習指導要領解説」 平成30年3月265頁

² 文部科学省 「次世代の情報化推進事業(情報教育の推進等に関する調査研究)成果報告書 主体的・対話的で深い学びの実践に向けた ICT 活用のあり方と質的評価—平成29年度 ICT 活用推進校 (ICT -School) の取組より—」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/11/1400884_3_1.pdf

³ 注2同8頁

⁴ 注2同10頁

とまりの中で」「ICT をどのように活用」するのか、という視点である。この視点に沿った他の先行研究としては、数学では、高等学校に関しては黒沢⁵、関数に関するものとしては加藤・森本・江森・杜⁶、中学校の数学に関しては竹下・原北⁷、があげられる。特別支援学校の聴覚障害に関するものとしては、家庭科の有友⁸、一斉授業に関するものとして坂口・金子⁹、ユニバーサルデザイン教育についての片岡¹⁰、がある。特別支援教育のものとしては、スヌーズレン教育の木村・安井¹¹、知的特別支援学校におけるアクティブ・ラーニングの高橋・羽藤・及川・佐々木・品川・山口・中村・池田・清水¹²、特別支援教育と ICT 教育に関して西端¹³、があげられる。(ただし研究時間が限られていたためすべてを網羅したものではなく、散見する限りにおいて、関連するものをあげさせてもらった。)

以上のように、ICT 活用について肯定的な実践研究や意見がある一方で、ICT 活用そのものに批判的なものも多い。例えば、田中¹⁴は、ICT の特性が教育に与える影響を批判的に検討している。さらに、新井¹⁵は教育の情報化「デジタル化によって恩恵を受ける弱者もいる。逆にデジタル化が新たな弱者を生むことがある。」としており、川上¹⁶も同様の危機感をもって教育におけるデジタル・ディバイドを分析している。これらの批判や危惧は、情報化だけでなく学校教育そのものにとって重要な意味をもつものである。前述したように『学校教育の情報化の推進に関する法律』第1条第3項は「学校教育の情報化の教育の機会均等」を規定しており、根拠となる憲法の「教育の機会均等」といった教育の根幹をなす最も重要な理念である。われわれ教員は、ICT 活用においてどんな肯定的意見があろうとも、学校教育の場で「新たな弱者を生む」デジタル・ディバイドは許してはいけな。かつて学生時代、憲法学の教授¹⁷は「人は平等になんて生まれない。だからこそ、法によって平等にするのだ」と語った。この教授の言葉通り、憲法の、法の「一番小さな声をきく」という理念を、社会の中で、教育の場で、私は実践したい。だからこそ、後述する授業実践では、もっとも慣れていない生徒に基準を合わせた。次章では、世界を一変させた新型コロナウイルス感染症拡大下での政府の対応と学校教育について概観していく。

2 新型コロナウイルス感染拡大防止対策下での ICT を活用した授業実践

令和2年2月28日文部科学省より「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」の通知¹⁸がなされ、「本年3月2日(月)から春季休業の開始日までの間」「臨時休業を行うようお願いいたします。」とあり、「臨時休業を行う場合における配慮として」「1 新型コロナウイルスの感染の拡大を防止するための臨時休業の措置であるという趣旨を児童生徒に理解させ、人の集まる場所等への外出を避け、基本的に自宅で過ごすよう指導すること。」「3 児童生徒が授業を十分受けることができないことによって、学習に著しい遅れが生じることはないよう、可能な限り、家庭学習を適切に課す等の必要な措置を講じるなど配慮すること。」が示された。さらに6月9日には文部科学省初等中等教育局教育課程課より「新型コロナ

⁵ 黒沢学 「高等学校情報化における ICT 機材活用の今後—教育工学の視点から—」東京電気大学総合文化研究第15号2017年175頁から178頁

⁶ 加藤慎一・森本明・江森英世・杜威「思考の反復を促進するための ICT 活用に関する基礎研究：関数的見方・考え方を生かした問題発見・解決過程に焦点を当てて」東北数学教育研究学会誌第50号2019年63頁から72頁

⁷ 竹下俊一・原北祥吾「ICT 活用を基盤とした教科等の指導とカリキュラムの課題—中学校における数学科・特別活動に着目して—」第一工業大学研究報告第33号2021年115頁から121頁

⁸ 有友愛子「ICT を活用した特別支援学校(聴覚障害)における家庭科教育の取り組み」日本調理学会誌51巻1号2018年58頁から61頁

⁹ 坂口嘉菜・金子敏明「聴覚障害児を対象とした一斉指導場面における言語学習 ICT 教材の活用法と効果の検討」上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要第25巻号平成31年43頁から46頁

¹⁰ 片岡美華「ユニバーサルデザイン教育と特別支援教育の関係性についての一考察」鹿児島大学教育学部研究紀要第66巻2015年21頁から32頁

¹¹ 木村牧生・安井友康「スヌーズレン教育のための ICT 機器の活用について」北海道教育大学研究紀要第70巻1号2019年137頁から143頁

¹² 高橋円・羽藤幸恵・及川和恵・佐々木千尋・品川倫行・山口美恵子・中村くみ子・池田泰子・清水茂幸「知的特別支援学校に在籍する児童生徒のコミュニケーション能力を効果的に促す支援システムの開発—アクティブ・ラーニングに 必要な言語領域に焦点を当てて—」岩手大学教育実践研究論文集第6巻号平成30年39頁から44頁

¹³ 西端律子「特別支援教育× ICT 教育をめざして」教育システム情報学会誌第31巻3号2014年223頁から224頁

¹⁴ 田中紀子「ICT を活用した事業における学習と生活の関連性」岐阜経済大学論集52巻3号2019年53頁から68頁

¹⁵ 新井紀子『本当にいいの？デジタル教科書』岩波書店2012年8頁

¹⁶ 川上ちひろ「デジタル・ディバイド～授業や試験のオンライン上で新たに生じる格差への危惧～」医学教育第51巻4号2020年455頁から456頁

¹⁷ 山下威士 新潟大学名誉教授 令和2年11月瑞室中綬章受賞

¹⁸ https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

ウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」のための学習指導について¹⁹が出され「感染症対策と子供たちの健やかな学びの保障の両立」として「感染症対策を講じつつ、学校教育が協働的な学び合いの中で行われる特質を持つことに鑑み、学校教育ならではの学びを大事にしながら教育活動を進め、最大限子供たちの健やかな学びを保障」し「新学習指導要領の目指す学びを着実に実現」すべきとしている。そのためには「臨時休業中も、学びを止めない」こと、「速やかに、できることから学校での学びを再開する」こと、「あらゆる手段を活用し、学びを取り戻す」こと、「柔軟な対応の備えにより、学校ならではの学びを最大限確保」が必要であるとしている。

これらの通知等を受け、各学校はどのように教育活動を行っていたのだろうか。NHK 放送文化研究所²⁰の調査によると「臨時休校期間（2020年4月～5月）」の家庭学習支援について、全国の「特別支援学校の小学部と中学部では『学校で独自に作成した動画教材』が5割を超えていた。また小学部と中学部とも同時双方向型のオンラインでの指導が2割を超えていたのが注目に値する」とされていたにもかかわらず、「学校再開後の調査時点（同年10月～12月）」には「それぞれ2割程度に下がっていた。」²¹という。その理由として「聴覚に障害のある子どもたちで、教師がある程度見通しを持ち視覚教材の準備をする、あるいは子どもにも視覚的にわかりやすい発表の用意を求めることがあり、難しさを感じた」や「学年によって機器の利用スキルが違うこと、保護者が不在の場合は参加できない児童がいる」²²などがあげられている。この調査結果とともに、令和3年8月23日に本校校内研修として行われた東北福祉大学大西孝志教授の『聴覚支援学校における ICT 機器の有効活用について』では、「オンライン、オンデマンド授業講義」は「通信回線は最も弱い人を基準に」、「同時双方向のオンライン会議システムは最も慣れていない人を基準に合わせる」ことが重要である、との示唆をいただいた。

加えて令和2年6月文部科学省「教育の情報化に関する手引き（追補版）」には「特別支援学校（聴覚障害）の高等部では」「自立と社会参加に向けて必要な資質能力をつけるにあたり、情報社会の現状を踏まえ情報機器を活用した職業教育を行うことが大切である。」としており、「昨今の職場環境を意識して」「基礎的な知識と技能を身につけていくことが重要である。」とされており、指導にあたっては「特別支援学校では、各教科及び高等部に設けられた教科「情報」を要として情報教育を展開し」「障害による操作の困難を補い」「個々の生徒に応じた具体的な支援を考える必要がある。」とされている。

以上のことから、本校高等部における新型コロナウイルス感染拡大防止対策下での ICT を活用した授業実践は、生活応用コースの生徒を対象に、自立と社会参加に向けて必要な資質能力をつけるため、「情報」を要として「数学」において、情報機器を活用した情報教育と職業教育を、個々の生徒に応じた具体的な支援を考えながら、行うこととした。

3 令和3年度高等部生活応用コースにおける ICT を活用した授業実践の根拠と理由

ここで、1から2までのまとめとともに、授業実践にかかる、生活応用コースの生徒を対象に、自立と社会参加に向けて必要な資質能力をつけるため、「情報」を要として「数学」において、情報機器を活用した情報教育と職業教育を、個々の生徒に応じた具体的な支援を考えながら、行った根拠と理由について述べておく。

生活応用コースの生徒を対象としたのは、前述とおり法の要請だからである。憲法、「学校教育の情報化の推進に関する法律」第3条3項に基づく「教育の機会均等」と、「新たな弱者を生む」デジタル・ディバイドは許してはいけない、との思いからである。

自立と社会参加に向けて必要な資質能力をつけるため、との学習目標は、平成30年特別支援学校学習指導要領に基づく。特に対象生徒が全員3年生であるため、目の前に迫った社会参加に向けて、「昨今の職場環境を意識して」「基礎的な知識と技能を」卒業までに「身につけて」欲しいとの思いから学習目標に設定した。

¹⁹ https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt_syoto01-000007788_1.pdf

²⁰ 宇治橋祐介・渡辺誓司『GIGA スクール構想と「オンライン学習」に向けたメディア利用～2020年度「新型コロナ下の小学校、中学校、特別支援学校でのメディア利用に関する調査～」から』放送研究と調査第71巻6号2021年48頁から79頁NHK放送文化研究所

²¹ 注20同68頁

²² 注20同73頁

「情報」を要として「数学」において、情報機器を活用した情報教育と職業教育を、個々の生徒に応じた具体的な支援を考えながら、行った理由は、筆者が数学科の教員であること、「教育の情報化に関する手引き（追補版）」に、「『情報』を要として情報教育を展開」し、「個々の生徒に応じた具体的な支援を考える必要がある。」とされていること、なにより、「学校教育の情報化の推進に関する法律」第14条には、情報通信技術を活用した効果的な教育方法の普及、改善及び充実にかかる学校教職員の資質の向上も定めているためである。言うまでもなく本論執筆の理由もここにある。

4 令和3年度高等部生活応用コースにおける ICT を活用した授業実践²³

i 生徒の実態

本科生活応用コースは聴覚障がい（下線札谷：表記については、管理職より指示があり、法令ではなく本校学校案内記載と一致させた）はとその他の障がいとの重複障がいの生徒が在籍するコースである。令和3年度生活応用コースは、学習グループを D1 から D3 の3つのグループに分けてられており、本稿において対象となるのは、3年生が3人の D2 グループの生徒である。情報機器については、端末機器の簡単な入力や操作はできるもののオンライン学習に必要な Web 会議システムを使った双方向のやりとりは未経験であった。

ii 授業と背景

令和3年4月25日大阪府において三度目の緊急事態措置が発出された。当初期限は5月11日までだったが、延長がなされ期間は6月30日までとなった。この期間、生徒は登校し、授業も行っていたが、いつ何時双方向のオンライン学習を行わなければならない事態となるかわからない、という状況にあった。そのため、緊急的にこの時期から週4時間の数学の授業のうち2時間をパソコン室での授業に代えて、オンライン学習ができる体制を整えることとした。授業内容については、前述のとおり、情報科の教員の協力の下、支援の方法を相談しつつ行うこととした。

iii 単元設定と指導内容（単元と評価及びシラバスとの関係については別紙）

前述したように、生徒たちはオンライン学習に必要な Web 会議システムへのログイン自体が未経験であったため、まずはそこから始めて段階的に双方向のやりとりができるように数学の調べもの学習をきっかけとして指導を進めた。

単元は、別紙のように「量と測定 1長さ」であり、本時は第三次の6時にあたる。まずは、Google を用いて調べもの学習を行う前に、アカウントの配布と生徒自身によるパスワードの設定を行うことにした。大阪府ではビデオ会議を含む双方向の学習やインターネットを使った学習には、Google Workspace for Education を義務付けており、アカウントの@以下が定められている。このため、アカウントに関しては情報科の教員が前もって設定し、パスワードのみ生徒自身で設定できるよう指導を行った。支援方法としては、用紙をみながら作業できるよう、アカウントと初期パスワードを記載し、手順を① google chrome ② Google Classroom と入力するローマ字を記載した。パスワード設定については、念のため用紙に記入させて、教員が管理することとした。

次に、ちょうどオリンピック開催の年でもあったので、マラソンの距離や陸上男子200mのオリンピック記録を調べ1秒間に何m走ったかを計算させた。

iv 結果

パスワード設定はスムーズに行うことができた。生徒に聞いてみるとゲームを通じてインターネットに接する機会が多く、Google Classroom は知らなかったものの、google chrome はそのマークを知っていた、とのことだった。生徒たちにとっては、教員よりもインターネットは身近であり、ログインさえできれば双方向のオンライン学習もそれほど障壁が高くないのかもしれない、とのうれしい誤算があった。調べもの学習についても同様で、教員の支援の必要もなく、各自ワークを見ながら陸上男子200mの記録を小数点2桁まで正しく調べることができた。続けて、陸上男子ハードル400m、陸上男子1500m決勝の記録も同じく小数点2桁まで調べることができた。ただ、1秒間

²³ 参考論文として、太田要次・大森直也・中村健介「新型コロナウイルス感染拡大防止対策下の特別支援教育の教育実践に関する研究—ICTを活用した都道府県の取り組み状況とA特別支援学校の取り組みからの考察—」こども教育研究第7号2021年17頁から31頁

に何m走ったかについては式を立てるのも難しい様子だったので、時間をかけて定着を図る必要があると考え、次回に持ち越しにした。

v 授業以外での生徒の変化

わざわざ書いておきたいくらい生徒たちには驚くべき変化がみられた。この授業のすぐ後、生徒自ら日本語ワープロ検定試験の受験を申し出た上、「残ってパソコンの練習をしたい」と放課後、情報室で毎日1時間検定対策を行い、3級と4級の合格を果たした。本人たちが自らの意思と努力で掴み取った検定合格だった。もちろん検定の合格がすべてではないが、させられる学習ではなく自ら進んでパソコンの技術と知識を獲得した姿は、まさに生徒たちの生徒たちによる主体的で深い学びではなかったかと思う。情報科の教員とともに毎回支援には何が必要か、授業はどうしたら理解しやすいか、私たちに懸念に考えてきた、その結果が、支援が、生徒の変化を生んだとしたなら、教師冥利に尽きる、うれしいできごとだった。

おわりに

社会学ではよく「あたりまえを疑え」と言われる。この新型コロナウイルスは、疑うことすらなかった日常のあたりまえを根底から覆した。昨年政府が出した新型コロナウイルス感染症対策のための一斉臨時休業は、学校は行ってはいけない場所であり、みんなと一緒にいてはいけない場所、友だちと直接顔をみて話をしてはいけない場所、近づいてはいけない場所、笑ったりはしゃいだり歌ったりしてもいけない場所なのだ、と告げられた瞬間だった。大人の教員である私がとてつもなくショックだったのに、子どもたちはいかほどだったかと想像するだけで胸がつぶれそうになる。新型コロナウイルスは人生を生きる上で最も大切な他者への信頼、所属する集団への信頼を奪ってしまった。

しかし、皮肉なことに新型コロナウイルスが学校教育の情報化を促進したのも事実である。「GIGA スクール構想」が前倒しされ、全国9割の学校で校内通信ネットワーク整備がなされた²⁴のも新型コロナウイルス感染症対策のため、いや、おかげなのだろう。

本稿の目的は、『学校教育の情報化の推進に関する法律』14条にいう情報通信技術を活用した効果的な教育方法の普及、改善及び充実にかかる学校教職員の資質の向上である。

そのため、私は、人の英知による最新の情報通信技術を用いて、新型コロナウイルスが奪った他者への信頼を子供たちに取り戻したいと思う。同じ場所にいなくても画面の向こうには、何も気にせず以前と同じように笑い合える友だちや、あなたを想う大人が、信頼できる他者が、あなたに寄り添っているんだという、教育の、人間関係の本質を取り戻したいと思う。安心できる場所としての学校を、授業を、再構築したいと思う。その事こそが、法の求める「情報通信技術の特性を生かし」た授業であり、子どもたちが「学校教育の情報化の恵沢を享受」するものであると信じている。

(*本稿作成に当たっては、高等部情報科の垣内耕一郎先生、村川総治先生に助言と協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。)

²⁴ 注20同48頁

単元名	量と測定 1 長さ		ワークの ページ	P. 4～18
配当時数	6時間	活動時期	9月中旬～ 下旬	学習指導要 領の内容 B ア, イ, ウ

単元の目標		数量などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。
単元の 観点別 評価規 準	知識・技能	長さの単位 (mm、cm、km) について知り、測定の意味について理解できる
	思考・判断・表現	日常生活における数量の関係に着目し、図や式を用いて、二つの数量の関係を考察できる
	学びに向かう力、人間性等	長さについての単位や関係について振り返り、数理的な処理のよさに気づき日常生活や学習に活用しようとしている。

単元の指導と評価の計画 (全6時間、本時は第6時)

次	時	学習内容	評価方法		
			知・技	思・表	学び
第一 次	1	長さの単位 mm cm m km	○		
	2	身近な長さ バスケットボールチームの身長		○	
	3	1周400mのトラック		○	
第二 次	4	学校へ通学する 会社へ通勤する		○	○
	5	電車や飛行機で移動する		○	○
第三 次	6	Google を使って調べてみよう オリンピック マラソンの距離 海外旅行 都市の距離			○

「こころとからだを育てる実践」を考える

寄宿舎 研修係

1 はじめに

今年度の舎生数は4名という、かつてない人数のスタートとなった。数年前は15～20名近く在籍していたが、近年舎生が減少傾向にある。しかし、少ない人数だからこそ生まれる生活や取り組み、行事もたくさんある。一人ひとりに合わせた生活リズムが確立でき、舎生間の困りごとや話し合いも、丁寧にじっくりと時間をかけて行うことができる良さがあると思う。私たち指導員は子どもの願いに寄り添い、自らのスキルを向上し舎生対応していかなければならない。私たちは交代勤務であるため、引き継ぐことを大切にして毎日に向き合っている。舎内での研修を充実させるために、模索しながら深めたいと思った。1年間の研修の振り返りと課題を書きたい。

2 研修テーマ

令和3年度 「こころとからだを育てる実践～一人ひとりの思いをつなぐ～」

昨年度も「こころとからだ」をテーマとしたものだった。寄宿舎生活において生と性については切り離せないものであり、性教育を単純に生殖や性交、性行為という意味だけではなく、幸せに生きるために必要で共に学ぶことであると考えている。心身ともに成長すると生活も豊かになり、そのなかで関わる職員が子どもの思いを感じ取り、子ども同士や子どもと大人を“つなぐ”役割を担っていききたいという、「～一人ひとりの思いをつなぐ～」をテーマに盛り込んだ。

3 年間計画

事例検討会（2回）、学習会（1回）、グループ討議（2回）、読み合わせ
研修報告会、研修や研究会への参加（寄宿舎研、特総研、全日ろう研など）
近ろう基本問題研（寄宿舎が話題提供）
成人ろう者からの学び（PTA 進路見学会に参加するなど）
第2回校内研究会発表にむけて（今年度中止）

月	日（曜日）	内容	舎生の様子	備考
4	28（水）	研修計画等確認		
5	21（金）	グループ討議①		
6	25（金）	事例研究会①		
7	28（水）	学習会 （講師：千住真理子さん）		
10	1（金）		前期〆切	
11	22（月）	グループ討議②		
1	28（金）	事例研究会②		新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため延期
3	18（金）		後期〆切	
	29（火）	総括		

4 研修係の方針

研修計画を決めていく中で、今年度の到達目標について考えた。昨年度のテーマを継続することで、生と性についての学習会や事例研究会、グループ討議も計画した。その内容については、都度議論を重ねて決めていった。今年のポイントとしては、「研修として」「部会として」の境目が分かりにくく、「もっと深め（追究）たかった」「部会との違いがわからない」などの意見が出されることがあった。この意見をクリアするためにも、研修の意図（目的）を明確にし、何度も伝え続けていかなければならないと方針を固めた。

5 舎内研修会を経て

(1) 夏季休業中に、講師を招いての学習会を行うことができた。

7月28日(水) 寄宿舍内にて

演題 「生活を豊かにする性教育」

講師 NPO法人 大阪障害者センター 千住真理子さん

舎内で事前アンケートを作成し、千住さんに講演していただきたいことをまとめた。

- ・発達段階のまちまちな寄宿舍で集団での性教育の限界を感じている。どうしても個人の指導になってしまうことは仕方ないことか…。
 - ・異性とのスキンシップについて、重複生で年齢が上がってくるとどこまでOKとするか?迷うことがある。
 - ・これまで性教育の導入に行われることが多かった「虹の輪」ですが、身近な人からの性被害も多く、実践上子どもたちへの伝え方も工夫が必要になっていると思います。このように実践者側にとって取り組みやすいけれど、使い方には様々な考慮が必要なのがあると思います。「かえって間違ったメッセージになってしまっってはいけない」そのような躊躇を乗り越える勇気を与えてもらいつつ、実際の場面での注意点や配慮点を教えていただければと思います。
- (一部抜粋)

事前にまとめておくことで、千住さんにも研修内容を把握してもらえ、スムーズな進行となった。

生と性についての指導は、私たちの中でもまだまだ手探りのところも多々あった。実際子どもと性教育の話になるときは、設定した場ではなく、生活の中で自然に出てきた疑問や質問をきっかけに、指導することが多い。取り組みの中にも取り入れて系統的に進めていくことも積極的に行っている。

実際に千住さんが教材として持参してくださった、男性の内性器・女性の内性器(図1)を見せてもらい、性教育をどう進めているかをきいた。やはり、目で見えない体内のしくみについての説明は工夫が必要だと感じたが、千住さんの教材はとてもわかりやすく、月経や妊娠、セルフプレジャーなどの伝え方について学ぶことができた。

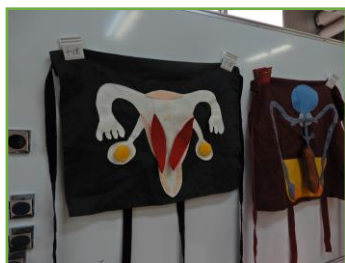


図1



図2



図3

学習会後、千住さんの教材を参考にしたものを作り、それを使って「からだのことを知ろう」という表題で性教育を行った。1回目は女性の体のしくみを知るということで、男女一緒に学んだ。舎生は恥ずかしがることなく真剣にきいていた。女性には月経というものがあり、赤ちゃんを産む準備をする…など見てわかる教材を使い、ロールプレイを取り入れて話をした。胎児と母体をつなぐへその緒を見せて、「これは何か知っていますか?」と舎生に尋ねると、「見たことある!」「へその緒」と声が上がった。それをきっかけに他にも質問や感想がたくさん出て、一人ひとりが体を大切にしようという気持ちが芽生えたように感じた。2回目は男性の体のしくみとして、同じように手作り教材を使って取り組む予定である。

講師を招いての学習会ができたことは成果であり、性について伝える工夫の大切さを感じた。話すきっかけはたくさんあるが、どう話を進めていくべきか悩むこともあるという声もあった。一人ひとりの発達段階が違い、身体の成長も異なるため個別指導になることも少なくない。私を含め多くの職員が、性教育に対しての知識をもっと学びたいと思っている。学期に1回は取り組みの中に組み込んでいるが、回数についてはもう少し増やしても良いと思った。

(2) グループ討議

ア 1回目 「一人ひとりの思いをつなぐために～子どもが見える職員の連携～」

ケース例を出し、当事者の立場、同僚の立場、行動に対する見立てなどを出し合い深めていく。

各グループからの報告で、「基本は舎生対応した職員に任せている」「子どもの見方についてもっと話し合うべき」などの感想が出た。職員一人ひとりの見方や感じ方も違うので、一人の舎生を中心にどういった支援が必要かを引き継ぎや部会でもっと出し合うことが大切だと確認ができた。

イ 2回目 「子どもの姿を共有するために大切にしたいことは何ですか」

日々の生活記録（実践記録）を書くとき、「大切にしていることは何か？」「職員間で共有するための工夫は何か？」アクティブラーニングの観点を基にKJ法（付箋法）を用いて、付箋を使い発想をまとめる。

思いつくままに付箋に書き出し、分類して模造紙にまとめた。それぞれの思いを出し合えた。互いの大切にしていることや記録の書き方などを知ることができよかったという感想が多かった。

少人数でのグループ討議は、より多くの声を聴ける良さがある。自由に発言できる場であり刺激し合える場だと思った。否定肯定にとらわれずに自分の考えを出していき、同僚の思いや見方を共有する時間となり、グループ討議が2回できたことは良かったと思う。

6 おわりに

今年度も、学習会1回、グループ討議2回、事例研究会1回を行うことができた。事例研究会2回目が新型コロナウイルス感染症拡大のため延期になったことは残念だった。今年度、特に千住さんの学習会が実施できたことは、大きな成果だった。外部講師を招いての学習会や講演会などの実現により、新しい見方や発想が生まれ、プラスになるように思う。研修で学んだことや身につけたことを実践に活用していくことが研修会の役割であると思う。子どもの実態に合わせて指導をしていくことが、今確実に必要なことである。そのためには職員間での共通理解と認識がポイントであり、舎生の小さな変化にも気づき共有していかなければならない。しかし、毎年研修を計画するが時間が限られていることが現状である。その限られた時間の中でも、職員一人ひとりスキル向上をめざし、互いに学びあうことは止めることなく継続していきたい。私たちは、心と体のバランスがまだまだ未熟な舎生たちを支え、子どもたち同士でも支え合える集団になってほしいと願っている。支援する私たちのスキルアップと子どもの明日のため、これからも試行錯誤していきたい。

（文責 片山恵里）

子どものねがいに寄り添って

～実践を記録し、実践を共有する～

第5分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 片山 恵里

【概要】今年度は舎生減に伴い、例年は学部ごとの担当だったが担当制ではなく4名の舎生を13名の職員全員で支援することになった。日々の引継ぎや週末の部会の持ち方も工夫し、より舎生のお話をする時間を増やすように心がけている。舎生Aが入舎当初よりコミュニケーションや手話表現も増え、生活が豊かになっているように思う。Aが他者との関わりを楽しみ、自分自身の気持ちと葛藤する姿を見て、職員全員で語り合う。毎日記録している生活記録を振り返り、自分の見立てや仮説を他の職員はどう思うかを交流し、舎生の生活の広がりを共有していく。

【キーワード】安心する場 自ら学ぶ 葛藤 他者を意識する 生活記録 記録を共有

1 はじめに

舎生Aは入舎して3年が経つ。Aは知的障がいがあり自閉的傾向が強く、自分の気持ちを手話で表すことが難しい。しかし、少しずつ身につけてきた手話表現で今は自分の思いと手話が一致し伝える力がついてきた。「好き」「嫌い」しか言えなかったAが、簡単な会話ができるまでになった。毎日のルーティンをしているかのように見えるが、さまざまなことを感じ、時には葛藤しながら過ごしている。また、友だちを意識し始め、周りの様子を窺って行動をする姿には「私も寄宿舎の一員」と安心しているように思える。Aのエピソードをどのように職員間で共有しているかを報告したい。

2 Aにとっての寄宿舎生活

(1) 毎日のルーティン、心安らぐコーヒータイム～引き継ぎで共有～

Aの帰舎してからの生活はほぼ決まっている。手洗い・うがい・検温といった流れが現在の決まった行動である。体温計がなかなかもらえないと「早くもってこい」と言わんばかりに職員を呼ぶ。以前は、自分のタイミングではないと学校の制服から着替えることもできず頑なに動けなくなっていたが、今は自分自身で気持ちを切り替えることができ、自室に上がる。「ゆっくりはあとで…」と考えを変えたのだろうか。入浴、夕食、取り組み、おやつタイム、コーヒータイム、就寝準備…という流れが日常である。夜のおやつタイムは、コーヒーの作り方が決まっている。初めにコップを持ってきて、職員に自分の名前が貼られた箇所を見せ、数字の「3」を表し、自分の名前が文字数「3」（例えばえりなら2文字）が同じことを確認する。次にコップいっぱいのお湯を入れコーヒー粉末、砂糖、クリームの順に入れる。量にもこだわりがあり、砂糖3杯、クリーム2杯。そこでも数字の2や3を表し、量の確認をする。自分が満足する数を覚え、職員に確認することで文字と言葉が一致し認められた喜びが生まれたのだろう。そんなAに、ある日一人の職員がコップを出し、自分にもコーヒーを作ってほしいとアピールをした。すると、同じ手順でコーヒーを作ってくれた。さらに女性職員がコップを出すと砂糖やクリームは半量ずつになった。また他の職員がお願いをすると、なぜかブラックだった。なぜ違うのか？翌日の引継ぎで話題になり、「女性には甘くして、男性には太ってはいけなくてブラックにしたのでは」「この先生はブラックが好きと知っていたのではないか」などたくさんの仮説が立てられた。その後もコップを出すと、職員に美味しいコーヒーを作ってくれた。しかし、ある日から女性には紅茶に変わった。これについては、職員に振舞っていたら自分の大事なコーヒーの減りが早いことに気づいて紅茶に変えたのではないかと私たちは考えた。ただ単純に作っているだけでなく、自ら学び、自ら方法



図1 コーヒーを作っている様子

を変えたことに感心した。この様子を引き継ぎで話題にすると、さまざまな見解が出された。大切なコーヒータイムを過ごすために、自ら考えた結果だったと思う。

(2) 友だちとのかかわり～生活記録で共有～

最近のAは、みんなに2本指で指と指をタッチする挨拶を求めるようになった。初めは1本指でのスタートだったが、今は2本に変わっている。タッチをしてもらうと満足したようにその場を去るが、タッチを求めることが多いのは、夜の8:30に女子が自室に上がる時である。Aなりの「おやすみ」なのか、それを拒まれるとタッチをしてくれるまで追いかけたこともあった。自分の気持ちを表し、1日の締めくくりをつけているように思う。みんな嫌がらずにタッチしてくれるので、Aの気持ちは満たされていると思う。女子が自室に上がる姿を見て、自分もそろそろ就寝準備に上がるという認識もあるようで、他者の行動を見ている。ある朝には同室のBが先に1階ホールに降りていると、いないことに気づき慌てて降りてきたことがあった。そして「着替えていいか？」と職員に聞いたと引継ぎであった。そんなに関わりがないと思っていたBが、Aにとっては大きい存在だったのだ。ある日の生活記録に書いてあった。

Bが歯を磨き終わるのを見て、C先生に「行っていい？」と洗面所を指さし歯磨きを始めた。後追い。Bを意識しているように思う。Bが仕切りのカーテンを閉めると、舎室の入り口に行ってカーテンを閉めた。

他者を意識し、様子を見て次に自分がすべきことを判断した。少し前には自分のやりたいことをやりたいときにしていたAだったが、現在は自治活動や取り組みなど、みんなと一緒に参加できるようになった。職員が「挨拶だから立とう」と言っても動かなかつたが、友だちからの誘いや立つ姿を見て自分も同じように動くようになった。仲間意識が深まりつつあることと、自分もこのメンバーだという意識の表れと思う。安心できる場として毎日を過ごせているのである。

3 記録を残し、実践に活かす

毎日舎生の様子を残す生活記録(実践記録)は、主にその日の宿直者が記入する。その記録を読み返すと、職員一人ひとりの書きようも違う。視点も違う。同じ日の出来事でも、食事を中心に書いている職員もいれば生活の流れを中心に書いている職員もいる。私自身はどうかと思い返したとき、ただ出来事を書くだけでなく、舎生が言った言葉や行動についてどう思ったか。どうアクションしたか。その結果どうだったか…。そういうことを書き残すことが大切ではないかと改めて思った。Aの生活は日々変化しており、そのちょっとした変化を感じ取って引き継ぎで話題にする。「私のときはこうだったが、他の先生のときはどうでしたか？」と聞くことで、新たな発見やそんな見方もあるのかと知ることができる。職員それぞれの思いや願いを互いに知り、子どもの姿と併せて必要な支援を考える。自分とは違う観点は当然なのだから、語り合いこそが実践への広がりにつながっていくと思う。

4 おわりに

入舎した当時のAは嫌なことは目を背け見ようとしなかったが、今は自分で手話表現するほどコミュニケーションが広がった。日々の会話や引き継ぎの中で、細かく知り得ない入浴指導やトイレ指導のことも、他の職員から聞くことで発見することができ、またその情報を確認し合うことでAの変化を見逃さず感じることができる。生活記録を残すことがAの人生そのものを残すことになる、大袈裟かもしれないが私は思う。Aは自分の過ごしてきた生活を自分自身で語るができない。好き・嫌いは表せるが、それも私たちがAとの関係性が築かれているからこそ理解できるものであるし、今後Aが社会に参加していくときには、次の支援者に引き継ぐ使命があると思う。Aが自分の思いを手話や数字で表し、それが職員や友だちに伝わったことで、他のさまざまな場面で使えるようになった。その表現を職員が考え理解し、仮説であっても共有することでAの思いが形になり、その繰り返しで毎日の生活を豊かにしていくと思う。

子どものねがいに寄り添い、小さな変化をさまざまな観点で話し合うことと、実践を記録していくことが、子どもの明日へと繋がっていくと思う



図2 取り組みをしている様子